
その拳で語る者

椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その拳で語る者

【Nコード】

N3753V

【作者名】

椿

【あらすじ】

とある世界で最強の座に就いた男、忍。

彼は歳をとり後はただ死を待つのみとなった。

しかし世界は新たな戦いを彼に課す。

なぜか世界を渡ることになった忍は、いきなりなぜか瀕死に!？。

魔法が飛び交う新たな世界で、魔法の使えない忍はどうやって生きていくのか。

刮目して次回を待て!!

始めの方はオリジナル多めでお送りします。

第1話 又は プロローグ（前書き）

初投稿、初めまして！

椿です。

書くのは初めての初めてづくしのため暖かい目で見ていただけると幸いです。

読んでよかったと思っていただけるとよう頑張りますのでよろしくお願ひします。

更新はおおよそ1週間を目途にしていきたいと思ひます。

では、どうぞー！

第1話 又は プロローグ

そこに見えるものを果たして何と呼ぶだろうか。

歪でありながら清廉であり。

不恰好でありながら統一されている。

一言で表すならば正しく“異常”の一言に尽きるが、それすらも遠い。

ではなんだと言われると言葉に詰まる。

まあつまり、変な物が目の前にあるということだ。

そこっ！笑っていいぞ。

ただ多くの人間はこれを見なかったこととして通り過ぎていくだろう。

それが正しいかどうかは別として。

曰く、好奇心は猫をも殺す・・・らしい。

合っているかは知らない。

俺の持論だが、見て見ぬふりをするということは絶対にしない。

困っている人がいれば助けるし、泣いている者がいれば手を差し伸

べる。

俺はそうやって生きてきた。

もちろんひどい目にあつたのも一度や二度ではないが、それがどうした。

今更この生き方を変えらるると思えないし思わない。

まあ何が言いたいかというとな。

目の前にこんな得体の知れないものがあるのにスルーはあり得ないってことだ。

正直長く生き過ぎたと思っっている。

この生涯は全て戦うことにのみ費やしてきた。

“武の頂”そう呼ばれるようになってからも研削を積み続けた。

この身に届く武人はすでにおらず、挑まれることも少なくなった。

若かりし頃から比べると、とうに衰退し以前の覇気など微塵も無い。

しかし、今だ最強の座に揺るぎは無く不動。

最近の楽しみもめつきり減り、正直暇をもて余している時のこの事態。

正直心が躍る。

長くなつたが、いざ逝かん。

えっ字が違つ？

気にすんな。

きつと勘違いさあ。

と、何も起こらない？

肩透かし……。

ん？

なんか光つて……ぎゃあああg y z z z

魔帆良学園〜世界樹広場〜

「さあみんな、そろそろ帰る時間ね。かたづけはできたかしら？」

「「「「「は〜い!」「「「「「

現在、那波千鶴なはちずくはボランティアで保母の手伝いとして遠足に同行している。

ちづるは将来保母を目指しており、将来を見据えて学園の子供たちの相手をしていた。

子供が大好きなちづるにとっては正に天職と言えよう。

そんな彼女だが魔帆良学園に在籍する立派な中学生だ。

まあ見た目どう見ても2jy・・・。（生命の危機を感じたため中断しました）

・
・
・

失礼した。

ここは麻帆良学園。初等部から大学までを一か所に集めた学園都市で、多くの生徒が通っている。

都市とつくぐらいひとつの街としての機能を備えているのがこの学園の特徴だ。

学園の中心には学園のどの場所からも見ることのできるとてもない巨木が存在し、生徒たちの間では世界樹として親しまれている。

正式名称は「神木・蟠桃」。樹齢千年とも二千年とも言われているが定かではない。

そしてここはその世界樹の真下に位置する広場。

日が落ちはじめ世界が優しいオレンジ色に染まり始めている。

楽しかった遠足も終わり、全員いることを確認するため点呼を取っているが一人いない。

「ちづるお姉ちゃん」

「んっ？」

すると最後の一人、ひなたがちづる達に向かって走ってきている。

何やらずいぶん慌てているようだ。

ちづるはひなたを落ち着かせて話を聞く。

「あのね、あっちで変な格好したお兄ちゃんが空から降って来たの」

「？」

日常で聞くことのない人が降ってくるという言葉に千鶴の思考がついてこない。

「それでそのお兄ちゃんは何で降って来たのかしら？」

「ん〜とね、白い服のあちこちが赤くなってた。それにどこか苦しそうだったよ？」

その言葉を聞き、ちづるは血の気が引いていった。

この子の言葉が正しければその人はけがをしているということになる。

一刻の猶予もないと判断したちづるは子供たちにここで待つように言い、ひなたを連れてその男の人が倒れているというところへ急いだ。

ひなたの案内で向かった場所でちづるは息をのんだ。

そこには怪我で血を流し気を失っている青年がいた。

この出会いは果たして如何なる物語を紡ぐのであろうか。

第1話 又は プロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか？

ここから頑張って物語を盛り上げていきたいと思っておりますのでよろしくお願ひします。

あとレンタルマガキやゼンガー少佐が絡んでくるのはまだまだ先になりますのでご容赦ください。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

世界を渡るといふこと（前書き）

少し見直す時間をおいて遅くなりました。
では、ごうごう。

世界を渡るといって

時間は少し遡る。

流動忍りゅうどうしのは現在空を見上げている。
というより空に浮かんでいる。

落ちる様子はなく、ただ漂う雲と温かくもまぶしい太陽が見える。

よくわからないモノに触れて状況もよくわからない。

わからないことだらけだがひとつ気になっていることがあった。

「それで君は誰だ？」

気になっていたのはじつと忍を見ている幼女。

銀色を少し明るくした白銀のような髪を腰のあたりまで伸ばしている。
る。

現状を知っているかもしれない人物。

「・・・珀はく」

「？それは君の名前か何かか？」

「こてんと首を傾げる珀？（お持ち帰りを希望する）。

「君が首を傾げたら分らんだろう。まあいいが、では珀ここはどこだ？」

一拍をおいて珀から来た答えは忍からしたら全くの予想外だった。

「……ここはあなたの深層世界」

（深層世界？……ああ俺の心の中か。っ！？、おっ俺の心には幼女が住み着いているというのか！？）

のちに忍は語る、あの事実ほど俺を深く抉った一撃はなかったと。

閑話休題

「それでなんで俺は自分の深層世界にいるんだ。やっぱりあれに触れたせい？」

「……あれはきつかけにすぎない。あなたがここに来ることはすでに決まっていた、それが少し早くなっただけ。」

「？」

「深層世界は全て根源の渦に繋がっている。あなたにはここを介して別の世界に行ってもらおう」

「????」

「……理解してる？」

「いいえ！」

その声は力強く、すべてを圧倒しうる威厳に満ちていた。

……言っていることは馬鹿以外の何ものでもないが。

忍は頭が良くない。

勉強する時間すらも放り投げて自分を鍛え続けた結果、馬鹿になった。

あえてもう一度言おう、「馬鹿である」と！

そんな忍に難しいことを言っても理解できるわけがない。

「……もう少しわかりやすく言ひと？」

「……異世界に行く」

「拒否権とかは？」

「……そんなものはない」

ですよね。わかります。

「……それじゃあ準備はいい？」

「ちよつ！？準備もなにも説明すらろくにされてないんだが！？」

「……じゃあきちんと説明して理解できる？」

「……（汗）」

間違いなく難しい説明されても忍は理解できないだろう。

簡潔明瞭に、忍に説明するのはきつと骨が折れるに違いない。

少なくとも珀は説明を放棄した。

「……ひとつだけ、あなたにひとつだけ“力”をあげる。でもすぐには使えない。すぐだとあなたの身体が耐えられないから。だから“力”に身体が耐えられるようになるまで待つて。」

「それはどんな“力”なんだ？」

「……それは使えるようになればすぐに分かる」

そう言つて珀が手を前にかざすとそこには丸い門が出現した。

「……ここをくぐればすぐに着く。それとごめんなさい」

突然の謝罪に忍は困惑した。

さっきまでとは打つて変わつてまるで泣き出しそうな顔をしている。

「……これは私のわがまま。この後世界で起こる悲劇を私は止めたかった。でも私にはそれを止めることが許されないから、ただ見ていることしかできない。でもあなたなら何とかしてくれると思つた。」

「……。」

「……勝手なのは分かつてる。あなたの意志を無視してこんなこと頼むべきじゃない。でもどうかお願い、ひとりでも多く報われないう子達を助けてあげて欲しい」

そういつて頭を下げる珀の真摯な願いと想いに忍は震える。

その願いに、その想いに心から応えたいと思つた。

だからこそ、忍は許せなかつたのだらう。珀の今にも壊れてしまひそうなその姿が。

「珀、頭を下げる必要はない。お前は自分にできることを必死で考えて、それでここに俺を呼んだんだらう？」

「……ただ願うのでもなく、乞うのでもなく、ましてや嘆いたわけでもなく、自分にできる最善を尽くしたんだらうが。だったら、」

どんつと構えて胸を張れ！”」

「っ!?!?・・・うん。改めて貴方をお願いする。やってくれる？」

その表情には先ほどのような憂いはなく、強い意志を宿していた。

「ふっ・・・。やってやるぜっ!」

「不思議な人・・・」

忍が去ってから珀は先ほどの邂逅に思いを馳せていた。

表情から伺い知ることはできないが、珀の心は晴れやかだった。

「・・・本当に“大空”のような人だった」

それはこの世界が何よりも表していた。

人は心のどこかに闇を持っている。

それは深層世界では色濃く反映される。

今まで珀が出会って来た人間の世界は、お世辞にもきれいとは言えなかった。

しかし忍の世界の何と清々しいことか。

一面の大空に優雅に漂う雲と、天高く輝く太陽。

これほどまでに広く高く、そして暖かい世界を珀は知らなかった。

だからこそ信じてみたいと思った。

「・・・どうか、かの者に祝福を」

暖かい光に包まれながら、少女の言葉は大空へと溶けていく。

「というわけでやってきました、異世界です。リポーターは私、流動忍です。それではあちらをござらん・・・はあ。飽きた。」

ひとりでカメラ（空想）に向かって話している忍（痛い子）は、すぐにマイク（幻想）を手放し現状の確認に動きだした。

「それにしても、なんで俺若返ってるんだ？間違いなく100歳近い爺さんだったのに」

この世界に来る前の忍は90台半ばを過ぎた老人だった。

しかし、今の彼の見た目はどんなに高く見積もっても高校生ぐらいだろう。

黒く長い髪は所々はねているものの全体的にはまとまっており、顔立ちは精悍。

身長は平均よりも高く、体は全体的に引き締まっている。

といってもマッチョというわけではなく脱いだらすごいだけで、服を着ていれば至って普通の体型。

服装が黒を基調として選ばれているため、髪の色もあつて真っ黒に見える。

そんな中で首元で光る剣を模した白いネックレスが、ひとつのアクセントとなっている。

「まあたぶん珀が何かしたんだろう。そんなことよりまずはここがどこなのかだ」

決して軽く流せる内容ではなくても流してしまう、これぞ忍クオリティ。

忍は軽く周りを確認するが、人の気配はない。

ただどこかの街の中だということは分かる。

現在いる場所は高台のような場所で街の様子を伺うのには適していた。

「街並みからするにヨーロッパあたりか。まあ行ったことは無いが」
敷き詰められた石畳に、西洋建築を模した建物。街灯なども雰囲気に合わせて統一してある。

日本家屋は見当たらないことからまず日本ということはないだろうと忍はあたりを付けた。

「まずい、おれは日本語以外喋れないぞ!？」

円滑なコミュニケーションこそがもつとも大事なことだ。

初っ端からつまずいていた。

というか、地球上の言語が通じるかどうかすら分らないだろうに。

「・・・いや、ひとまず保留だ。とりあえず衣食住の確保を優先すべきだな」

となれば即行動と、忍は動き出したがすぐに足を止めた。

目線の先には一人の少女が街を見下ろしていた。

とても寂しそうな目で。

そんな者を忍が放っておくなど、彼の矜持が許さない。

「何をそんな寂しそうな顔をしてんだ？」

「っ!?!?・・・誰ですか？」

少女は突然話かけてきた男に警戒心を抱く。

忍は忍で普通に日本語で話しかけ、普通に日本語で返答されたことに気がついていない。

「ただの通りすがりのものだよ。放っておけなくて声をかけたんだが」

そういつて忍は少女を観察する。

間違いなく美人の部類だろう。眼鏡をかけていることもあり知的に見える。

ふと、少女は皮肉げに顔を歪めて答える。

「私のことは放っておいて欲しいんですが、・・・一つ質問いいですか？」

そういつて少女は学園の中心に位置する世界樹を指さした。

「あれを見てどう思いますか？」

「あれってただの樹だよな、それが一体どうしたと・・・」

この人もかと、少女は心の中で落胆していた。

今まで少女がこの学園の異常性を話した相手はよくわからないといった顔をした。

そしてその後大抵が少女を馬鹿にしたような目を向けている。

それがこの少女の心に大きな傷を残していた。

所詮理解されることはない少女は思い、踵を返そうとした際に忍が声をかける。

「・・・なんだ、あの樹大きいとか以前にデカ過ぎないか？」

そう話す忍の言葉に少女は固まっていた。

「そもそも、なんで最初にあの樹を疑問に思わなかったんだ？」

学園には認識阻害の魔法が掛けられている。

これは、魔法、もしくは異常とも思える状況に出くわしたとしてもその出来事をさも普通であると誤認させる効果がある。

よってこの魔帆良学園の中ではどう考えても普通の域を逸脱している世界樹すらも、ちよっと大きな普通の樹として認識される。

忍は武術によって己の体をすべて支配下においている。

そのため、忍は他の人間より精神に干渉してくる類いの魔法に強い。しかし、あくまでも一般人よりはという状態の為、今回のように指摘されなければ気付かないだろうが。

稀にだが、そういった類の魔法を一切受け付けられない者も存在している。

忍の目の前にいる少女などそのもつともいい例だろう。

「あなた・・・いや、あなたはあの樹が異常なのが分かるんですか！？」

「わかるも何も、どう見ても普通の大きさじゃないだろう？」

忍にとっては何気ない言葉、しかしその言葉がどれほど少女の心を救ったことか。

「すん、っつっつっつん」

気がつけば少女はひと目をはばからず泣き出していた。

もちろん忍は訳がわからず混乱することとなる。

「ちょっと、えっ？なっなんで!？」

「っん、すみまつ・・・せん・・・っ、すん」

「とにかく泣きやんでくれな・・・なんだ？」

必死で宥めようとしていると不意に違和感を覚え、そしてそれは危険信号へと変貌する。

忍のもとに明確なる殺意が迫る。

その場に飛来するひとつの影、ふり下ろされる拳とともに……。

世界を渡るといふこと（後書き）

ここから1週間おきの掲載になると思います。
では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

誤解とは知りえぬところで生まれる（前書き）

1週間後の予定でしたが早めました。
では、どうぞ！

誤解とは知りえぬところで生まれる

高畑・T・タカミチは現在、広域指導員として学園を巡回していた。

魔帆良学園はその気質からか、とんでもない事件が起こることが度々あった。

そういつた事件や争いなどを抑制、もしくは鎮圧するのが彼の仕事となっている。

そのせいもあってか学園の不良で彼の名を知らぬものはおらず、死の眼鏡 デスメガネ として恐れられている。

「今のところ問題なしと」

その時タカミチの懐にある携帯が鳴り響いた。

「どうしたんだい、エヴァ？」

『たった今学園内で異常な魔力反応を検知した。世界樹広場の近くだ』

電話の相手は現在学園の監視員的な立場にいるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

彼女は600年生きた真祖の吸血鬼であり、かつて世界に悪名轟か

せていたが現在は学園の監視員を務めていた。

『魔力自体は大したことないんだが、どうやったのかいきなりあらわれた。どんなに巧妙に隠したとしても何らかの違和感があるはずなのだがそれが一切なかった。一応警戒しておけ』

そう言って通話は切れ、残されたタカミチは走りだした。

(とにかく急いで現場に向かおう。何もなければいいんだけど)

常人では決して理解できない速さで街中を駆け抜ける。

時には屋根の上を飛び移りながら、しばらくしてタカミチは到着し目を疑った。

そこには微かに魔力の反応を残す青年と、涙で頬を濡らす長谷川千雨の姿があった。

一瞬にして頭に血が昇り形容しがたい感情に支配される。

(許さない！)

タカミチは拳を振り降ろす、大切な元担任生徒を悲しませている者に向けて。

・・・そこに大きな間違いがあることも知らずに。

上空から降り注ぐ殺気に反射的に忍はその場から飛退いた。

忍が避けるのとはほぼ同時にタカミチの拳が振り下ろされる。

避けられたことでより一層警戒を強め、千雨を庇うように身体を前に出す。

当の千雨は混乱していて現状を正しく理解できていない。

それも仕方がないだろう。

さっきまで話していた相手と突然乱入してきた元担任が、いきなり一触即発の雰囲気醸し出しているのだから。

しかし、忍の混乱も千雨とほぼ同等のものだろう。

何せいきなりわけの分らないオッサンが乱入してきて、あまつさえ忍に明らかな殺意を向けている。

「……長谷川君大丈夫かい？」

「え？……いや、あの……大丈夫ですが」

「そうか、よかった」

千雨の無事を確認し、目の前にいる忍へと視線を向ける。

「おい、オッサンいきなり攻撃してくるとは一体どういうことだ」

「・・・君が僕の元生徒に手を出したからだ」

そういつてタカミチは両の手をポケットへと収める。

「いや、手を出したって一体何言ってるんだ？」

突然のことに困惑する忍をよそにタカミチは戦闘準備を終える。

そして無音の拳が忍に迫る。

「っ!?!?」

居合い拳。

それは刀の居合いと同じように、拳を刀にポケットを鞘に見立てた一撃。

魔力を用い極限の速さまで拳速を加速させて放つ拳圧は、達人といえど察知が難しい。

当然防御などできるはずもなく、一撃が腹に突き刺さる。

続けざまに放たれた10発もの拳も忍は成す術もなくその身に受けることとなる。

「ぐうっ!？」

一般人であれば一発でも貰えばその意識を刈り取る。

タカミチは当然忍の意識を根こそぎ奪うつもりで10発もの拳を叩きこんだ。

「・・・驚いた。まさかこれだけくらってまだ立っていられるとは」

「痛う」。そいつはどうも

(今のところ問題はないが、あれを何十発ももらうのはまずいな。それになんだあの速さ、音すらないから察知が難しい。どういうからくりかは分らないが、距離を取っていても埒が明かないか。)

すぐさま攻勢に移せるよう姿勢を低くしようとして固まった。

タカミチの醸し出す雰囲気忍の足が無意識に少し下がる。

脳が警告を発している、これは危険だと。

それは長年闘争の中に身を置き培った、一種の防衛本能。

「・・・左腕に 魔力 。・・・右腕に 気 。・・・“合成”！」

とつさに忍は距離を取るため後方に飛ぶが。

「これで最後だ」

タカミチの手から放たれたソレは今までのとはあらゆる意味で異なっていた。

豪殺居合い拳。

魔力と気の合一によって生まれる咸卦法（別名をアルテマ・アートという）によって強化された状態で放つ、タカミチの切り札。

先ほどの居合い拳と違い、使用までに若干のタイムラグがあるがその分威力は高い。

まさしく一撃必殺。

対魔力も何もない人間にとってみれば、それは致命傷を与えるであろう一撃だ。

豪殺居合い拳をもろに受けた忍は空へと投げ出され、森の中へと姿を消した。

放心状態から回復した千雨が、追撃を掛けようとするタカミチに詰め寄った。

「高畑先生っ！あなたは一体何をしているんですか」

突然の糾弾にタカミチは困惑した。

「何をつて長谷川君を襲っていた彼を「私は襲われてなんかいません！」なっ!？」

文字通りタカミチは言葉を失った。

ここにきてようやく間違いに気づく。

しかしそれは決定的に手遅れとなっている。

「落ち込んでいた私に彼は優しく話かけてくれたんです。それをどうしてあんな……」

タカミチは千雨の言葉に血の気が引いて行く気がした。

全く非のない者に対して拳を向けたそれは彼にとって許しがたいことだった。

「僕はさっきの青年を探す。長谷川君は寮に帰るんだ、いいね」

「・・・分りました」

納得できないという顔をしながらも、一応タカミチの言葉に従い帰って行った。

千雨が見えなくなったのを確認し、タカミチは森へと足を動かす。

彼が無事であることを祈りながら。

朦朧とする意識の中で忍は歩を進める。

少しでも距離を離すためにほぼ条件反射のように歩き続ける。

傷は深く、一歩踏み出すごとに意識と体力を奪っていく。

それでも前へ・・・。

少しでも前へ・・・。

足が動く限り・・・。

しかしその行進もすぐに終わりを迎えた。

立っていることも覚束なくなりゆっくりと倒れる。

薄れゆく意識の中で忍は一人の少女を見た気がした。

誤解とは知りえぬところで生まれる（後書き）

いかがでしたか。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

仕事と遊びと約束と（前書き）

気がついたら1日1話更新していました。
では、どうぞー！

仕事と遊びと約束と

森の中で血まみれの忍を発見した千鶴は、子供たちの手を借りてポランティアをしている保育施設へと運んだ。

これは位置が森の中であったことと、ここが学園であり内部に病院がなかったため最善と思われる手として千鶴は施設を選んだ。

子供たちに手伝ってもらうことにためらいを覚えたが、そんなことをいっていられる状況ではないと割りきる。

施設に到着し最初は驚いていた職員達もすぐに現状を理解し、ベッドやシート包帯や消毒といった現在必要なものを的確に準備する。

この対応のよさは、よく怪我をする子供たちの相手で自然と身に付いたものだ。

しかし今回の怪我はひどいため、近くにある診療所の先生が来るまでの応急処置としてなされた。

治療も無事終わり他の者が退室したあと、一人残った千鶴は看病を続けていた。

「んっ。・・・ん？」

タカミチによる襲撃の約4時間後、忍は目を覚ました。

「あら、目が覚めましたか？」

〈状況説明中〉

「助けくれたこと、感謝する」

目を覚ました忍は千鶴から状況の説明を受け、深く頭を下げた。
まだ起き上がることができないため寝たままではあるが。

「それでどうして血まみれで倒れていたのか話してもらえますか」

千鶴が気にしていたのはその一点。

無理もないだろう。

学園というごく限られた中で、血まみれの人物と遭遇する機会など無いに等しい。

「うまく説明できるかどうかかわからないが」

忍は説明をした。

しかしうまく伝わらなかった！

「・・・とにかく、住む場所や仕事の宛てがないということですか？」

どつちやら行くあてが無いということとは正確に伝わったようだ。

「そうなる 涙」

「わかりました。少し待っていてください」

「??????」

忍の混乱をよそに席を外した千鶴は園長先生のところへ向かった。

実は千鶴には一つ宛てがあった。

というのも今忍達のいる施設は、孤児院も営んでいる。そのため、子供たちの世話をする意味で必ず、二人は常駐することとなっている。

しかし先々月ここに住みこみで働いていた女性が一人やめてしまっていた。

住みこみのためその女性は必ずいたため、残りのメンバーでローテーションを組んでいたのだが。

一人抜けかつ泊まり込みの回数が急激に増えたため、結構な負担と

なっていたのである。

「と、言うわけで彼を雇ってはどうかでしょうか？男性ですから安全面の意味でも良いのではないかと思います」

思案顔で考えこむ園長。

当然、見ず知らずの人物を雇うことに難色を示すが千鶴のいうことも正論であった。

「分かりました。ただし一週間は試用期間ということで様子を見てから判断します」

こうしてあっけなく忍の衣食住（仮）が確保された。

↳ 一週間後↳

さて忍の怪我也・・・何、手抜き？なにをいうか！

特に語るべきことなど無かったただけであって、断じて手抜きではない。

……「ほん。

さて忍の怪我也完治し今日から仕事が始まる。

これから一週間は試用期間となっている。

事前に職員にはあいさつはすませており、今日は子供たちへの挨拶となっている。

施設自体は休日のため職員、子供ともに少ない。

千鶴も本日は不参加だった。

忍が今日会うのは施設で暮らす七人の孤児たちだ。

「みなさん、おはようございます」

「……………おはようございます……………」

「はい、実は今日から新しい先生が増えることになりました。流動先生よろしく願います」

園長先生に促され前へと進む忍の顔には若干の緊張が見て取れる。

「流動忍ですっ！……………失礼。流動忍です。よろしく」

後ろにいる職員たちは笑いを堪えるのに必死になっている。
子供たちはもちろんお構いなしで大笑いだ。

「……………でしつ！」「……………」

なんだかんだでつかみは良かったから結果オーライ……になるのか？

あいさつも終わったので、忍は早速子供たちと遊んでいた。

忍の思考回路はいろんな意味で単純にできている。

そういうところ本能的に理解したのか、すぐに子供たちと仲良くな
った。

傍からみると、大きな子供が一人増えたように感じられる。

「流動せんせつ！鬼ごっこしようぜ！せんせが鬼な！」

「ふっいいだろう。……全力でやらせてもらおう」

（（（いやいや、全力はまずいだろう!?）（（（

大人たちは心の中で一斉につっこんでいた。

宣言通り忍は全力（病み上がりのため一般成人男性程度）で鬼ごっこに臨んだ。

しかし敵も手強い。

地の利を生かし、あの手この手でのらりくらりと逃げ続ける。

足は忍の方が圧倒的に早いが、そのことは子供たちも理解している。

そのため直線での追いかっこは避け、身体的特徴チビっこいを生かしジャングルジムの中やすべり台などを縦横無尽に駆け回る。

44

「くそ、すばしっこいな!」

子供の持つバイタリティは大人が思うよりずっとすごい。

開始から結構経っているが今だ忍は捕まえられずにいた。

「こっちこっち」

「はやくつかまえてみるよ、せんせっ」

ひとまず生意気そうなやつ（ゆうき）を捕まえるべく動き出そうとしたが、後ろから聞こえてきた泣き声に足を止めた。

忍が声の方を向くとひなたが転んでいた。

「ひなたがまた泣いてるぞ！」

しかも周りにいた男子×2がひなたを指さし笑っている。

子供の世界は残酷だ。

加減を知らない子供たちは多分にやりすぎる上に無自覚だ。

この二人にしてもいつもと同じように噓し立てているにすぎない。

だがその笑い声もすぐに止まることになる。

先ほどまで笑っていた二人の前に、忍（般若）がいた。

「まず二人ともそこに正座」

もちろん逆らえるはずもなくいわれるまま正座。

泣いているひなたをどうにかなだめ、いつの間にか集まってきた他の子たちにも座るよう指示をだした。

「さて、なぜ俺が怒っているか分かるか？」

正座をしていた二人は怯えながらも頷く。

「じゃあ何をしないといけないかは分るよな」

「……ごめんなさい」

ひなたに向かって謝罪の言葉とともに頭を下げた。

「ひなた、こいつらを許してくれるか？」

「……ぐすつ。うん」

その言葉を聞いた忍は、一転して穏やかな顔になり三人の頭を順番に撫でた。

「悪いことをしたらごめんなさいと言う、良くしてもらったらありがとつと言う。すぐくあたり前のことだが、これをできないヤツが

結構多い。」

そう言うと忍もゆっくり腰をおろした。

「だがお前たちは、自分の間違いを認め謝ることができた。これはすごいことなんだ」

子供たちは静かに忍の言葉に耳を傾ける。

「今回この二人はきちんと謝ることができた。お前たちはどうだ？間違ったことをしたらちゃんと謝れるか？良くしてもらったらちゃんと感謝できるか？」

「」「」「うん！」「」「」

「よし、なら俺との約束だ。約束は守るもんだぞ！」

そうして、ここに一つの約束が成された。

試用期間は瞬く間に過ぎていき、そして・・・。

「それでは、流動先生を正式に採用したいと思います」

正式採用が決定した。

「忍っ。終わった？」

説明等がちょうど終わった頃、職員室の扉を開けて覗き込むようにひなたとゆうきが顔を出した。

「おう、終わったぞ。」

そういうと二人は嬉しそうに忍の手を引き遊び場へと向かって行った。

「子供たち、いつの間に忍のこと名前で呼ぶようになったのかしら？」

「確か仕事を始めてすぐでしたよ。きっと子供たちなりの信頼の証なのでしょうね」

千鶴と園長先生は今までと、そしてこれからに思いを馳せる。

「ちょっと妬けますね。でも子供たち、すごく楽しそう」

「ええ。まあ私からすると大きな子供が一人増えたような感覚ですね」

笑顔で飛び回る子供たちを見つめる二人の顔も、やはり笑顔だった。こんな優しい日々がずっと続くことを祈りながら、千鶴は子供たちの元へと歩き出した。

仕事と遊びと約束と（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回の話は私的にとても苦しいもの（内容的に）でした。
住む場所の話なので避けては通れず。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

名刺の住所を尋ねたら（前書き）

一日明きました。

では、どうぞ！

名刺の住所を尋ねたら

忍の採用が正式に決まってから一週間が経過した。

朝早く起き、まずは表の掃き掃除をする。

この時いつも新聞を届けに来る、元気で足の速い女の子と世間話をするのが日課になっている。

ちなみにどちらも名乗っていないので名前はお互いに知らない。

「それじゃあ私はそろそろ」

「ああ、引き止めてごめん。いってらっしゃい」

「はい、いってきます」

これが終わるとすぐに料理の準備を始める。

以外なようだが忍は家事を一通りこなせる。

する必要があったため身につけたのだがそれは別の機会に語るとしよう。

ちょうど準備が終わる頃には子供たちが起き始める。

着替え、顔を洗って食事となる。

食事のあとは洗濯を行い、ちょうど干し終わる頃に他の先生たちが
出社してくる。

ここまでが忍の毎日の日課。

休日でもここまででは行つことになっている。

そして今日はその休日。

初めての休暇をどう過ごすのか悩んでいる忍の元にひなたが駆け寄
ってきた。

「ねえ、忍。そこで拾ったの、これ何？」

そう言つて一枚の紙を忍に見えるように掲げた。

「ん、これは名刺じゃないか？ほら、会社名とか住所とか代表取締
役とか書いてあるし。」

（でも、代表取締役って何だ？代表を取り締まる……。は
っ！警察か！）

いいえ、社長のことです。

「よくわかんないから忍にあげる」

そう言つてすぐに興味を失つたひなたは、みんなのところに駆けて行つてしまった。

「いや、俺がもらつても困るんだが。ん？でもこれなんか面白い」と書いてあるな」

そう言つて今一度名刺を見直すと不思議なキャッチコピーとともに住所なんかも書いてあつた。

「あつ！ここ近いじゃないか。ふーん、暇つぶしにちょっと行つてみるか」

ちょうど近くにいた園長先生に声をかけ出かける旨を伝え、意気揚揚と住所に向けて歩き出した。

魔法使い派遣会社・アストラル

あなたのご要望にあった魔法使い、お貸しします

施設から出発して約一時間。
忍は道に迷っていた。

（住所みて近いからと飛び出してきたけど、良く考えたら俺このあたりの地理に全く詳しくない!?!）

激しく今更であった。

「仕方ない誰かに道を聞くしかないか。と、グットタイプینگ！」

忍の視線の先には、鮮やかな金髪の縦ロールと強気な碧の眼が特徴の美少女。

漆黒のドレスを身に纏い、優雅に歩を進めている。

・・・って、忍さんその人明らかに外国人っぽいんですけどいいんですか！？

特に気にすることなく話かけようとした忍であったが直前で動きを止めた。

よく見ると額に冷や汗が出ている。

どうやら外国人だと気がついていなかったらしい。

（やヴあい。この人、外国人さんだ！・・・えーと英語ですみませ
んって何だっけ？え、え、え、・・・）

「え、えくすぷろーじょん？」

忍は呪文を唱えた！

しかし何も起こらなかった！

「はい?・・・何をいつていますの?」

普通に日本語で返ってきました。

「つまり、道を聞くために話かけようとしたら外国人だったので英語を使おうとしてあの単語が出てきたと」

「・・・はい」

「ちなみに explosion は爆発や破裂という意味です。最初のあいさつとしては適していませんわ」

それはそうでしょう。

いきなり、爆発?なんて聞かれたら頭の上に?が浮かぶだけです。

「それでどこにいきたいんですの?・・・あら私の向かっている場所と近いですわね。それなら一緒に行きましょう。」

「よろしくお願いします」

忍は深々と頭を下げた。

歩くこと10分無事目的地付近に到着。

以外にも忍は近くまで来ていたようだ。

「さて、このあたりですね。ところであなたはどこに向かっていきますの？」

少女はこのあたりに何かがあるか考えながら忍に質問した。

「アストラルっていう会社。住所ではこのあたりになってる」

「アストラル!？」

なぜか驚愕する少女に困惑しながらも肯定する。

「ああ、そうだが。何だ、知ってるのか？」

「ええまあ。こっちですわ」

何やら思案顔で進む少女の後に続いて進んだ先には、小さな洋館が佇んでいた。

ビルとビルの上に位置し、知っていなければ気がつかないようなそんな洋館だ。

その洋館の表札には“魔法使い派遣会社 アストラル”。そして名刺と同じ文字がその下に刻まれていた。

「ここがアストラル」

「行きますわよ」

少女はためらうことなく軽い足取りで進んでいく。

忍も置いて行かれないよう足を速めた。

「って勝手に入ったらまずいだらう!？」

「構いませんわ。早くいらっしやい」

少女はチャイムも鳴らさず扉を開けてさっさと中へ入ってしまった。
渋々、忍も後に続く。

内装は古めかしさはあるもののきちんと掃除が行き届いており、清潔に保たれていた。

調度品の類も歴史を感じさせるものが多く、窓から差し込む光がより一層神秘性を引き立てる。

「ここです」

忍が内装に気を取られている間に到着したようだ。

少女がゆっくりと扉を開けた先には頭を抱えた二人の少年と少女がいた。

「お邪魔しますわ。」

その声に反応して二人が顔を上げた。

「アディリシアさん。いらっしやい」

「アディ！何勝手に入ってきとるん!？」

「そんなことよりもお客さんですわ」

そう言う少女に促され忍は前に進み出た。

「お客さん？いらっしやいませ。アストラルへようこそ！僕は社長の伊庭いつきです。」

年よりも少し幼く見えるこの少年は、その性格をあらわすように、髪は短く、染めても固めてもいない。

そんな中一際異彩を放つのが、右目を覆う海賊のような眼帯。

それさえも少年が身につけるとどこかユーモラスな感じがしてくる。

「私は穂波・高瀬・アンブラー。『社長秘書』兼『社長教育係』やね」

こちらの少女は髪が栗色のセミショート、薄縁の眼鏡をかけその奥には蒼氷色の瞳をのぞかせている。

いつきはスーツを着用し、穂波は真っ白なブラウスにタイトスカートの組み合わせ。

二人の挨拶を聞き思い出したかのように忍を案内した少女が声を上

げた。

「あら、そういえば私も名乗っていませんでしたわ」

少女は髪を掻き上げながら不敵に微笑む。

「アデイリシア・レン・メイザース、偉大なる魔術集団　ゲーティ
アの首領ですわ」

三人の挨拶を聞いた忍はさらに一步前へと進み出る。
短く息を吸い込み声に自らの名を乗せる。

「流動忍だ。よろしく頼む」

名刺に誘われ、たどり着いた先に待っていた魔法使い。
異能の力を持つ少年たちとの出会いはいかなる物語を紡ぐのか。

名刺の住所を尋ねたら（後書き）

いかがだったでしょうか。

やっとレンタルマガ力が繋がりました。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

人が思うより、少しだけ世界には魔法が多い（前書き）

やっとレンタルマガカのところまできてホッとしています。
でもあの人の影がいまだに無い。
いつになったら出せるんでしょうか？

というわけで、どうぞー！

サブタイトルを変更しました（2011/9/2）

人が思うより、少しだけ世界には魔法が多い

「ゲーティア？っていうのはアストラルと同じようなものなのか？」

「厳密に説明するなら違いますが、おおよそ同じものだと考えていただいて構いませんわ」

「それより今日はどういったご用件でしょうか？」

いつきが遠慮がちに忍に質問をした。

「用件ってほどのものでは無いのだが・・・これってあんたのか？道で拾ったんだが」

そういった胸のポケットから一枚の名刺を取り出した。

その時底知れぬ恐怖を感じ反射的に身構えそうになった。

（なっ！？なんだ一体この凍るような威圧感は！？）

そういつて前を見るとそこには修羅ほなみがいた。

「社長様。この名刺は特別なもんやから取扱いに気を付けるよう

いわへんかった？それを・・・何、落しとるん？」

穂波は笑顔なのにとてつもなく怖い。

現にいつきはかわいそうなくらい真っ青になっている。

穂波がこれほど怒るのには実はそれ相応の理由がある。

というのもこの名刺、一つの呪物フエティシユになっている。

紙は富士の霊水で漉いた後、神道の巫女によって清められている。

紙の内側にはヘイゼル呪物課課長が刻んだカバラ十字入りで、一枚一枚が意味を持つ。

「まあまあ。それよりこれに魔法使いがどうのって書いてあるんだが、あんたたち魔法使いなのか？」

忍が聞きたかったことはまさにこのこと。

魔法なるものがいかなるものなのかを知ることが本日一番の目的。

先日魔帆良学園内での突然の襲撃で男が使っていた奇妙な技ももしかしたらと考えていた。

最初に使った無音の打撃は百歩譲ったとしても、最後に見せた極大の一撃は間違いなく人のなせる技ではなかった。

忍は負けたら負けっぱなしで終わることを良しとしない。

そもそも突然の襲撃を受ける謂われがない忍にとって、またあの男が襲ってきたら、もしその場に子供たちがいたらと気が気ではなかった。

後顧の憂いを断つという意味でも、早々にあの男と決着を着ける必要があると感じていた。

「私とアディは魔法使いで間違いあらへんよ。でも社長は魔法使いやない」

「え？穂波そんな簡単にはらしちゃっていいの！？その事って秘匿義務があるんじゃない」

慌てた様子のいつきを尻目にアディリシアが穂波の説明を補完する。

「確かに魔法には秘匿の義務がありますが、必要としている人物にもそれを隠してしまつては本末転倒というものですわ」

「そういうこと。むやみに教えることは危険なことに巻き込むことになるから絶対にしたらあかん。やけど本当に必要なら話すことで危険なことから守ってあげられるかもしれへんやろ？」

二人の言葉に納得した様子とは裏腹に、忍は相変わらず頭の上にはマークを浮かべていた。

「ところで、どうしてあなたは魔法使いを知りたいんですの？」

アデイリシアの疑問に答えるべくポツポツと語り出した。

異世界云々は省いた上で、魔帆良学園のことから襲撃、保育施設のことまで。

話を終えた忍はゆっくりと息を吐いた。

思えば前に千鶴に説明する際は、危険なことに巻き込みたくないという思いがあったため要領を得ず、ほとんど伝わることがなかった。

誰にも話すことができない状況は予想以上に忍に負担をかけていたようだ。

「話は大体分かった。まずその男は魔法使いで間違いない」

「ええ、私も同意見ですわ。実際に見ればもっと詳しく分かるのですが」

魔法と一概にいつてもその下では無数に枝分かれしている。

そのため二人にもどんな魔法かまでは判別できなかった。

「いや、それだけわかれば十分だ、ありがとう」

そう言っつて微笑んだ忍を見て一斉に穂波とアデイリシアは目線を逸らした。

(なんやのあれ、あかん目を合わせられへん!? / / /)

(反則ですわ!? あんな顔するなんて / / /)

「「?/?/?」」

男二人は揃って首をかしげていた。

女性二人が揃って席を外したため忍はいつきと話していた。

「そういえば、俺達が部屋に入ったとき穂波と二人で何唸ってたんだ?」

「・・・ああ、あれはその・・・勉強してて」

「・・・勉・・・強・・・だと!？」

忍は勉強という単語に拒絶反応を示した。
さすがにいくらなんでもと思わないでもない。

「うん、僕は分らなくて。穂波は僕の出来に対して頭をか・・・
ってどうしたの!？」

忍が回復するまで10分もの時間を要したことをここに記しておく。

ほどなくして戻ってきた女性陣を交えて世間話を始めて4時間が経過した。

時計はちょうど6時を指している。

「少し長居をしすぎだな、俺は帰るとするよ」

そう言って席を立った忍に合わせて今日はお開きとなった。

玄関まで見送りに来てくれた三人。

アディリシアはまだ残っていくようだ。

「今日はありがとう。すごく助かった」

「そんな、こっっちこそ楽しかったよ。ありがとう」

そう言って嬉しそうに笑ういつきを見て忍は照れくさそうに頬を掻く。

「うちはいつでも歓迎や。また顔出してな」

「できれば私のいる時でお願いしますわ」

二人も全くの本心から忍を歓迎する。

「ああ、じゃあまたな！」

「行っちゃった」

名残惜しそうに忍の出て行った門を見続けるいつきにアディリシアが声をかける。

「また来ると言っていたではありませんか。それに連絡先も聞いたでしょう。今度はこつちから招待すればいいだけですわ。ほら、穂波からも・・・穂波？」

話しかけられた穂波は思考の海の中にいた。

「どうしたの、穂波？」

いつきの言葉で意識が帰ってきた穂波がアディリシアに聞く。

「アディ。彼、忍のことどう見る？」

「どつって、・・・ああそういうことなのです。それでしたら強者と見受けました」

「やっぱりか」

話に付いていけないいつきに穂波が説明する。

「あのな、社長。忍相当強いぞ。それこそここにいる全員が束になっても勝てるかどうかってぐらい」

その言葉にいつきは絶句する。

「ええ、そうでしょうね。おそらく魔法を使う前に刈られますわ」

「でも忍は魔法を知らなかったってことは魔法を使えないってことなんじゃ」

いつきの疑問はもっともだろう。

ただこの場合、前提条件が間違っている。

「違うぞ、社長。魔法が使えへんから怖いねん。魔法を使えんって

ことは武器は自分の体やる。戦士が魔法使いに弱いように、魔法使いもまた戦士に弱い、忍みたいなのは魔法使いにとって天敵や」

「しかも忍の場合、戦士は戦士でもマスタークラスです。一瞬で懐に入られて終わりですわ」

「もちろん始めから魔神を喚起していればまた話は変わってくるでしょう。そんな暇を与えてくれればですが」

二人の言葉に驚きながらもいつきは考える。

忍と敵対する姿はどうしても想像できない。

逆に背中を預けている姿は容易に想像することができた。

いつきは忍と共に闘う日が来る、そんな確信めいた予感を感じた。

「すっかり遅くなっちゃったな。心配させちゃってるかも」

そう考えた忍は知らず知らずのうちに早足になっていく。

「きゃあああああああ」

「!?!」

ほぼ走っている状態になっていた忍の耳に、心臓すら凍るような絶叫が響く。

叫びは前方の桜並木の先から聞こえた。

忍は全速力で走りだす。

何事もないことを祈りながら。

忍がたどり着いた場所には

紅く光る満月を背に、少女の首筋に牙を突き立てる小さな吸血鬼がいた。

人が思うより、少しだけ世界には魔法が多い（後書き）

いかがだったでしょうか。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

見えるモノ、それすなわち真実とは限らない

忍が姿を現したことで吸血鬼は露骨に顔をしかめた。

「ちっ、邪魔が入ったか。せっかくのいい気分が台無しだ」

忍は油断なく周りを確認しながら吸血鬼に問う。

「お前……一体その子に何をした？」

質問と同時に忍から明確な殺気が溢れ出す。

(なんだこの殺気は！？くっ、今の状態ではきついか？)

内心の冷や汗を隠しながら余裕の表情をつくる。

心情を悟らせず、ブラフとて一つの武器として扱う。

これこそ幾多の戦いを経てきた歴戦の兵が見せる強者の振る舞い。

「何をしていたかだと、くくく、見ればわかるだろう？血を吸っていたんだよ」

「なんつ・・・だと!？」

忍の驚愕の表情で固まった。

人間は本質的に自分と異なるモノを嫌う傾向にある。

人間と吸血鬼、見た目こそ似ていてもそれは異質なものであった。

恐怖と憎悪で顔を歪ませる、これがまさしく普通の反応であろう。

「血を吸う・・・蚊の妖怪、いやヒルの妖怪か!？・・・まさか・・・
・・・チュパカブラ!？」

「アホかつ!？」

だからこそ血を吸うと聞いて目を輝かせる忍は、ある意味異質だと思っ。

「なぜ、最初に吸血鬼が出てこない!？そっちの方が明らかにメジヤーだろう!？」

それは忍だからです。

「あとその麦わら帽子と虫取り網、虫カゴをどこから出した!? 捕まえるのか!? そんなので私を捕まえるのか!?」

それも忍だからです。

「えーい! そんな未知の生物を発見した少年のような目で、私を見るなあー!」

「……ひとまず撤退する。この屈辱決して忘れはしないぞ!」

「逃がすと思うのか?」

そう言って背を見せる吸血鬼に忍が言い放つ。

「……ひとまず、その装備を外してくれ。私はそんな恰好のヤツに追いかけられたくはない」

未だフルアーマー（むしとりしようねん）をパージしていない忍に
対して懇願する勢いで説得を試みる。

その熱意が伝わったのか、忍は若干ふてくされながらも装備を外す。

このやり取りで吸血鬼は忍に対して苦手意識を持った。

「こいつは返してやる」

忍が装備を外すのを待って抱えていた少女を放り投げた。

「っと、危ないだろう！」

「私の名前はエヴァンジェリンだ！覚えておけ」

そう言った時にはすでに吸血鬼の姿は無くなっていた。

「ふっ、次に会った時には必ずお前を捕まえてやるぜ！チュパカブラー！」

忍の中で吸血鬼 エヴァンジェリンの名前はチュパカブラに自動
変換されるようになった。

その叫びにエヴァンジェリンに想像を絶する寒気が襲ったらしい。

「貴様……一体その子に何をした？」

忍が腕に抱える少女をどうしようか考えだしたちょうどその時、
—
つの声が響く。

(なんかこんなやり取り最初にしたな)

若干の寒気を感じながら振り向いたそこには、刀を構える少女がいた。

どこかの学生服を身に着けた、広いおでこが特徴の少女だ。

忍はその学生服に見覚えがあったため、必死に思いだそうとしていた。

「何をしたって別に」「問答無用！」質問したなら話を聞けよ!？」

あまりのことに打ちひしがれるが、そんなことはお構いなく少女は刀を振り下ろす。

「ちっ、覇皇琉 対剣術“破蛇”！」

振り下ろされた刀を、てこの原理を利用し左右の手のひらで剣を破壊する。

いかに名刀と呼ばれる刀でも、横からの衝撃には弱い。

少女の刀もたやすく折れ、刃は明後日の方向へと飛んで行く。

「な、私の夕凧が!？」

自らの愛刀が折れてしまったことで膝をつく剣士。

忍はというとはば条件反射で武器を無効化していた。

武器を使う相手に素手ではどうしても分が悪い。

そのため対武器戦を想定し数々の対抗策を編み出していた。

「とにかく話を聞いてくれ。俺はこの子を襲ったりなんかしていない」

「信じられるか！」

目に涙をいっぱい溜めて、気持ちだけでも負けまいと忍を睨む。刀が折れたことがよほど堪えたのだったのだろう。

「少し落ち着け、刹那」

とそこに、ギターケースを背負った長身の女性が現れた。

褐色の肌に腰のあたりまで髪を伸ばし、全体的に妖艶な雰囲気醸し出している。

しかし何よりも目を引くのはその瞳だろう。

一度目にすれば強烈な印象を与えるほどその眼には力が宿っている。

「しかし！」

「上から確認していたがその人はその子を助けに入った側だ。そうだろう？」

「ああ、何やら悲鳴が聞こえてきたんでな。走ってきたところに」
の子を抱えたチュパカブラが居たんだ」

「「チュパカブラ？」」

「チュパカブラ！」

やけに強調する忍と困惑する少女たち。

「……とにかく、この人は敵ではないよ」

それを聞いた刀を振り回していた少女　刹那は瞬く間に土下座の
姿勢をとった。

「本当にすみませんでした！」

むしろ腹を切りそうな勢いに忍ともう一人の女性もたじろぐ。

「いや、分かってくれればいい。それよりもそれをやめてくれ！」

忍から許しを得てやっと刹那は土下座を止め立ち上がった。

「相棒が失礼をした。私は龍宮真名だ、よろしく頼む」

「私は桜咲刹那です。先ほどは本当に失礼しました。」

やっとまともに話ができる状態になった刹那を加え、各々が自己紹介を始める。

「俺は流動忍だ。刹那、刀すまなかった」

謝る忍とそれに合わせてさらに謝り出す刹那を、真名は暖かく見守っていた。

その後ひとまず連絡先を交換し、少女を二人に預ける頃には結構な時間になっていた。

刹那の背中で穏やかに眠る少女の顔。

それを見ていた忍もまたその表情は穏やかだった。

「それじゃあ私たちはこれで。それと今後、私か刹那の方から連絡

を入れるかもしれないからその時は頼むよ」

そう言って去って行った少女二人を見送って忍も帰っていった。

「お帰りなさい、忍」

玄関を開けた先に待っていたのは千鶴。

最後は長い長い千鶴の説教によって忍の一日は幕を下ろした。

見えるモノ、それすなわち真実とは限らない（後書き）

いかがだったでしょうか。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

義務と権利は違うもの（前書き）

お盆で少し間が空きましたが更新です。
では、どうぞ！

義務と権利は違うもの

『やあ、忍。早速なんだが実は学園長から君宛に伝言を預かってきている。内容については以下の通りだ』

本日深夜0時に世界樹広場前にて魔法使いたちの集会を行う。
その集会に貴殿も参加してもらいたい。

『正確にはもつと長く書かれていたんだけど、要約するとこんな感じだ。まあ、学園長は必ず参加させるようにといていたが、忍に参加の義務はないわけだから来るかどうかは君に任せる。確かに伝えたよ、それじゃあ！』

時間は集會が行われるとされる10分前。

ここ世界樹広場には多くの魔法使いが集まっていた。

教師に生徒と年齢に統一性はなく見た目も様々だ。

ここには学園長の近右衛門をはじめ、タカミチも含めたほぼ全ての魔法使いが揃っていた。

そして、その中には先日忍と出会った二人の少女もいる。

「真名、忍殿は果たして来るだろうか？」

「どうだろうか？学園長より預かった伝言は確かに伝えたけど、それでもここに来るかどうかは彼次第だからね」

そう言って真名はここに集まっている魔法使いたちを見渡す。

そのほとんどの者に見て取れるのが戸惑いや困惑だろう。

なにせ魔法使いに集合するように呼び掛けた近右衛門だが、理由を一切明かしていない。

忍に伝言を伝えた真名と、それを知る刹那も彼を呼び出したということは知っているものの理由は分かっていない。

しばらくして集会開始の時間を迎える。

しかし、未だ忍は姿を見せない。

「学園長、それで皆を集めて何をするんです？」

皆の疑問を代弁するように黒人の魔法先生　　ガンドルフィーニが
訊ねる。

「……ふむ、今日呼び出したのは皆に会わせたい者がおったから
なんじゃが」

「それでその会わせたい者はどこにいるんですか？」

その言に多くの者があたりを見渡すものそれらしい人物はおらず。

「それがまだ来ておらんようでの。ちと待ってもらえんか？」

近右衛門は何とか皆を説得し忍を待った。

この時、なぜ学園長は忍がくること前提で話を進めているのだろうか
と真名と刹那は首をかしげていた。

〈30分経過〉

「学園長……。どれだけ待たせるつもりですか？」

その声には怒気が含まれている。

他の者も声こそ出していないが、明らかに皆不機嫌になっている。

まあ、無理もないだろう。

理由も知らされぬまま呼び出され、あまつさえその理由しゆいは姿を見せず。

時間もかなりいい時間になっているため、すべての共通認識として早く帰りたいというのがある。

「龍宮くんっ！彼は一体いつになったら来るんじゃ！？」

さすがに焦り出した近右衛門は伝言を伝えた真名に問いかける。

「私は伝言を伝えたに過ぎない。それに来る来ないは彼に一任されているはずだが」

学園の魔法使いには学園長の招集命令にはよほどのことが無ければ応じなければならない。

しかし忍は学園に所属する教師でも生徒でもない。

完全なる部外者であり、そもそも魔法使いですらない。

学園長の招集命令に従わなければいけない道理など、忍には一欠片もありはしない。

正直、近右衛門は呼べば来るだろうという何とも軽い気持ちでいた。

そのつけが今きっちり回ってきている。

「ならば今すぐ電話して呼び出してくれ」

そして、その場にいる全員から向けられる無言の圧力に耐え切れなかった。

時間とか迷惑とかを考えて思うところがあった真名であったが、忍の携帯へと連絡を入れる。

ただ、返ってくるのは電波がない、もしくは電源が入っていないという通告。

「学園長、どうやら携帯の電源を切っているようだ」

「他に彼に連絡を取る方法はないのかの？」

「無いことは無いが・・・」

無いことは無い。

だが、この電話に掛けてくる際は本当に緊急時の時だけにしてくれと、忍に念を押されていた。

「彼から本当に緊急の時以外はこっちに掛けないよう言い含められている」

「今は緊急時、何としても今すぐ連絡をとるのじゃ！」

渋々ながら電話をかける真名。

よく見ると刹那も釈然としないという顔をしている。

コールを始めてすでに20を超えた。

さすがに無理だと思い諦めて切るうとしたとき不意に回線が繋がった。

『……………もしもし』

声の主は忍であったが、なんとというか怖いぐらい声に感情が乗っていない。

軽く恐怖しながらも努めて普通にふるまう真名。

「忍か？夜分遅くに済まない。真名だ」

『んっ？真名……………どうしたんだ？極力こちらには掛けないようにと……………もしかして、なにかあったのか！？』

真剣に心配しての言葉に、真名は何とも言えない罪悪感が湧いた。

「いや、大丈夫だ。心配してくれてありがとう。それよりも今日の集会のこと覚えているかい？」

『……………集会って真夜中に集まるってヤツか。でもあれは参加するかどうかは自由だと』

「それが状況が変わってね。今から来ることはできないだろうか？」

参加の強制とあつて忍も難色を示す。

『今日は無理だ。そもそも夜に抜け出すとかが難しいんだが』

「そつか、ならなんとか明日改めてお願いできないか？」

今日が無理なら明日ということを近右衛門から指示を受けて伝える。

『・・・参加は強制なのだろう？なら行くしかあるまい』

その声には明らかな憤りが見て取れる。

「本当にすまない」

『真名のせいではないだろう？明日は必ず顔を出すよ』

「よろしく頼むよ」

明日の約束が成され、集まっていた魔法使いたちはそれぞれの家へと帰って行った。

「真名、どうだった忍殿の様子は？」

皆が帰った後、刹那と真名の二人だけが残っていた。

「どうもこうもあれは大分怒っていたね。理由までは分らないけど、明日は一戦交えることもありそうだ」

「そうか、本来参加の義務のない忍殿を無理やり呼び出すわけだから、怒るのも仕方がないか」

そう言って二人して大きなため息が漏れた。

「明日が激しく不安だ」

その予感は見事なほどの中することとなる。

時間は再度集会が行われるとされる10分前。

またしても世界樹広場には多くの魔法使いが集まっていた。

幾人かはすでに殺気だっている者もいる。

そして、静かな足取りで魔法使いたちの前に進み出る者が一人。

その身に纏うは、白を基調としながら全体に桜の花びらを描いた着

物。

その着物の胸元は大きく開かれ、下には黒の服と剣を模した白のネツクレス。

全体的にゆったりとした着こなしで、歩く姿は尊大にすら映る。

しかし、纏う空気とその眼光は背筋が凍るほどに鋭い。

集まっていた魔法使いは一様に警戒を強める。

真名と刹那も以前に見た忍の雰囲気との違いに困惑する。

今の忍が身につけているのは文字通り戦装束。

戦うためにのみ身につけるその姿は、正しく武人のそれであろう。

近右衛門は一人前に出ながら忍へと問いかける。

「そなたが忍で間違いないか?」

「・・・本当に礼儀を知らないな、翁。人に名を尋ねる前に自らが名乗ってはどうか?」

侮蔑の目を近右衛門へと向ける。

今の忍の機嫌は最悪だ。

「むっ、それはすまなんだ。わしは近衛近右衛門、ここの学園長をしておる」

「お初にお目にかかる、流動忍だ。それで俺を呼び出したのはお前で間違いないか？」

忍の迫力に気押されながら何とかうなずく近右衛門。

それを確認した忍は大きく息を吸うと、ゆっくりとその拳を構える。

「そうか。では………戦いくみを始めよう」

義務と権利は違うもの（後書き）

アンチにならない予定でしたが少しアンチが入ってしまいました。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

桜と牙

「そうか。では………戦いくさを始めよう」

「待つて下さい!？」

今にも戦いを始めそうな忍に待ったをかけたのはタカミチ教諭。

気だるそうな目で声の主に眼を向ける。

「あんたは……この前いきなり襲ってきた眼鏡か」

この時初めてタカミチのことを認識した忍。

「あんたにも用はあるが、今はこいつが先だ。下がっててもらいたいんだが？」

「そういう分にもいかない。そもそもどうしていきなり戦いを挑むのかを教えてください」と

「黙れ!以前、問答無用で襲ってきたあんたがそれをいうのか?」

ぐうの音も出なくなってしまうたタカミチと、突然の事態に未だ放心中の魔法使いたち。

「ちと待ってくれんかの。わしも何故いきなり戦いを挑まれるのかてんで理解できておらん。理由を教えてくださいんかの？」

「理由など、礼儀知らずに礼儀を教えてやろうと思っただけだ」

その声のいたるところに怒気の混ざった忍の声は聞く者すべてを委縮させる。

「れ、礼儀知らずとは一体何じゃ？ そのようなことに心当たりなど……むう」

ここに至ってようやく忍が怒っている理由を知る近右衛門。

「あのような時間に電話、あまつさえ出て来いという。心当たりがないとは良く言えたものだ。それにあなたの行為は子供たちにまで害を及ぼした。それが気に入らないんだよ！」

当然だが真名が電話をかけた時間、子供たちは皆ぐっすり眠っていた。

その全てがたたき起こされたのだ。

忍が怒っている理由の大半は実はこっちだったりする。

「・・・いくぞ」

「・・・どうしても戦うというのなら僕がお相手しよう」

ここでタカミチが学園長の前に進み出る。

「いいだろう。ならあんたを倒させてもらおう」

それぞれがそれぞれの戦闘態勢に移行する。

「流動忍、“推して参る”」

先手を取ったのはタカミチ、放たれる居合い拳は確実に忍の顎をとらえている。

タカミチは以前と同様に速攻で決めるべく動く。

前の罪悪感なども押し込み、ただ眼前の“敵”を倒すために。

一足で放たれるいくつものに拳と、瞬時に発動した咸卦法。

打つ手はタカミチにとっての最善。

動きを封じ込め豪殺居合い拳を持って終となす。

見守る者たちは息を飲む。

タカミチは最初から全力だ。

咸卦法まで用いて速攻で勝負を賭けに来ている。

タカミチに油断はない。

だが、勝てるという慢心はあった。

以前に何もできなかった、今回もこれで終わると。

だからこそ

避けるわけではなく、平然と全てを撃ち落として見せた忍が信じられなかった。

「なんつ・・・だつて!!!??」

「どうした?この程度か、魔法使い」

忍は前の世界にて最強の座に辿り着いた。

だがそれも無傷で辿り着いたわけではない。

その間に幾多の敗北を知り、何度も地に伏した。

そのたびに立ち上がり、敗北すらも自らの力へと昇華させてきた。

故に辿りついた、不動の極地。

魔法使いの使う技はどれも“常識”ではありえないモノだ。

それはあり得ないと目をつむってしまつては勝てるものも勝てなくなる。

だから、忍はその“常識”すらも叩き伏せた。

そしたらなんてことはない。

タカミチの使うのは、速くて見えないだけのただの拳だ。

そんなもの問題にすらならない。

未知なるものは怖い。

魔法だから怖いのではない。

分からないから怖いのだ。

「くっ!?!」

だからタカミチは恐怖した。

忍が何をしたのか分らなかつた。

すでにタカミチに余裕も慢心もない。

持ちつるすべてを持って迎え討つ。

放たれるのは拳の雨。

間、間で特大の一撃が混ざる。

居合い拳の牽制、豪殺居合い拳の必殺。

確実の忍を刈るための鎌は舞う。

されど忍はその全てを相殺しながらも、着実にタカミチに近づいて行く。

「これにて幕とする」

忍の呟きにタカミチは気付かなかったが、その一瞬針に糸を通すような隙が生じた。

タカミチとて歴戦の猛者。

それを見逃すほど甘くない。

そこに本日最大の一撃が突き刺さる。

さすがの忍もその一撃を受ければひとたまりもない。

タカミチの顔にも勝利を確信させる笑みかのぞきかけて……一転した。

その顔は驚愕へと変わる。

苦悶の表情を浮かべていた忍の姿が、まるで塵気楼のごとく揺らぎ消えていく。

「覇皇流 歩法“桜舞”」

覇皇流 歩法“桜舞”。

達人でも習得するのに10年はかかると言われる無音移動術。花びらが舞うかのような動きで敵を翻弄する。

忍の姿は残像を残しながら、ゆらりゆらりと揺れている。

タカミチから打ち出される拳はどれも虚しく空を切る。

そしてついに忍がタカミチの懐へと潜り込む。

「歯を食いしばれ。こいつはちいとばかり痛てえぞ！」

咄嗟にガードを固めようと腕を交差させるが、その隙間を縫うかのように忍の拳が腹に突き刺さる。

「覇皇流 決戦術“穿牙”」

打ち出された拳に二段目の撃鉄が振り下ろされる。

「打ち貫け・・・パイル・バンカーあああ!!!!」

覇皇流 決戦術“穿牙”。

二段構えの対人専用決戦術。

一段目の攻撃により対象を上空へと押し上げ、その拳による二段目の追撃を持って敵を撃ち抜く。

忍の有する4つの決戦術のうちの一つ。

忍の二撃一対をその身に受けたタカミチはその時点で意識を手放した。

戦況を見守っていた魔法使いたちの顔は一樣に驚きに染まっている。

学園の中でも一二を争う実力を持っているのがこのタカミチ。

そのタカミチから降り注ぐ、雨の如き猛攻をすべて受けきった忍は全くの無傷。

それに対してタカミチは忍の一撃で沈んでいる。

決してタカミチが弱かったわけではないのは見ていれば分かる。

勝負は忍のワンサイドゲームとなった。

「・・・さて、勝負は着いた」

その言葉に我を取り戻した近右衛門は急ぎタカミチの救護を指示し、忍と向かい合う。

「まず、謝らせてくれ。どうもすまんのだ」

学園の長が頭を下げたという事実にも、他の魔法使いたちは少なからず動揺した。

黙って近右衛門を見ていた忍がゆっくりと口を開く。

「きちんと謝れるじゃないか。・・・誠意を持って人と接する。人の上に立つのならそれを決して忘れるな」

「それで、伊右衛門が俺を呼び出した理由は？」

戦闘の騒動が一段落したところで本題に入る。

「わしはお茶か！？・・・近右衛門じゃ。呼び出したのはお主にも学園の警備を手伝ってもらいたかったからじゃ」

「学園長！？正気ですか！？」

いきなりの話に周りが騒ぎだす。

「わしは至って正気じゃ。それに彼の實力は皆も見ていたであろう？」

「私は賛成です。忍殿なら信頼できます」

「私も同意見だ。反対する理由がない」

すかさず刹那と真名による援護射撃が入る。

実力は申し分ない。

しかしそれでも納得がいかないのが他の魔法使いたちの見解だろう。

「しかしですね・・・」

「盛り上がっているところ申し訳ないが、その話辞退させてもらう」

話をさえぎり忍がその意思を述べる。

「ふぉ！それはまたどうしてじゃ？」

「警備の仕事がどういったものなのかは分らないが、俺には手伝える時間がない」

朝から晩まで子供たちの世話をしている忍にとって、学園の警備まで引き受ける余力はない。

「もちろん目につく範囲で何かあった際は手を貸そう。済まないが、それで納得してもらえないだろうか」

本当にすまなそうに言う忍に、他の魔法使いたちは気まずそうに顔を逸らす。

刹那と真名は若干残念そうな顔をしていたが、すぐに切り替えたようだ。

「いや、それで十分じゃよ。では、これにて終了とする。皆、御苦労じゃった」

来るときとは違い帰る足取りは軽く、またその表情もどこか晴れやかだ。

今宵の月は暖かく、包み込む光はどこかやさしい。

空に見えるは十三夜月。
満月の時は近い。

桜と牙（後書き）

いかがだったでしょうか！

今回でやっとまじめな戦闘になったのではないのでしょうか。
忍くんの強さなんかはぼちぼち出てくるかな。

補足説明

今回の話で出てきた”桜舞”

知っている人は知っている。

そう、某黒猫でNo.？さんが使うものです。

実はこれ、書くにあたって絶対使おうと思っていたもののひとつだったり。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

吸血鬼と戦いの火種

「それで、吸血鬼って何だ？」

「・・・ほんま、唐突やね。まず理由を教えてください。」

ここは魔法使い派遣会社アストラルの応接室。

今日、忍は吸血鬼について尋ねるためこうしてアストラルを訪ねて来た。

ちなみに前述のセリフが応接室に入ってから最初の一言。

「俺が魔帆良学園内の住んでいることは前に話したと思うが、吸血鬼の噂を至る所で耳にする。もし実害があるなら子供たちに被害が出ないようにしないとイケないからな」

「なるほど。それでわざわざ聞きに来たというわけですか」

そう言ってお茶を飲んでいるのはアディリシア。

すごく普通にいますが、この人はアストラルの人間ではありません。

「でも、吸血鬼なんて実在するの？」

そして一番弱腰のこの人がアストラルの社長のいつきです。

激しく立場が逆のような気がします。

「まあ吸血鬼については実在しとるよ。私は出会ったことないけど」

「そ、そうなんだ・・・」

「まず吸血鬼とは、読んで字のごとく血を吸う鬼のことですわ。まあ鬼と言っても見た目は人間とほぼ変わりありません。異なるのは中身です」

「そこで吸血鬼にも二種類おつてな。普通の吸血鬼と真祖の吸血鬼や」

アディリシアと穂波がそれぞれの説明を補完しながら説明は続く。

「一般的に吸血鬼と呼ばれているのは前者です。太陽の光を拒み、十字架やネギの類を嫌う。対してハイデイルイトウオーカー 真祖の吸血鬼は、魔法世界の最強種のひとつですわ」

「最強種・・・」

いつきはさっきから体が微かに震えている。

「こっちも太陽の光とか十字架を嫌うけど、生理的なもので実害はあらへん。一番の特徴は不老不死やね」

ここで忍が一番気になっていた質問をする。

「吸血鬼に血を吸われると吸血鬼になるって言われてるけど、これは？」

「事実ですわ。ただ治療することは可能ですし、あれは吸血鬼化というよりは、傀儡と言った方が正しいような気がします」

(治療は可能なんだな。でも・・・カイライって何だ？虫か？)

いまいち内容が理解できていない忍だったが、治療が可能ということとは理解できた。

「じゃあ吸血鬼と普通の人間、吸血鬼なら真祖なのかどうかを見分ける方法は？」

「吸血鬼の外見的特徴としては犬歯が異様に発達しとることやね。やけどこれはどっちにも当て嵌まるし、そもそも外見で吸血鬼やと判断するんはかなり難しいと思うよ？」

「そうか、なら俺の会った吸血鬼はどっちか分からないのか」

少し落ち込む忍。

どっちの吸血鬼かで対応をかなり変更しないといけない。

「ちょっと待ってください。あなた吸血鬼と会ったんですの!？」

声をあげるアディリシア。

いつきと穂波も声こそ上げなかったが、その表情には驚きが見て取れる。

「言わなかった?初めてここに来た日の帰りに桜並木で会ったんだ。何してるのかって聞いたら、血を吸ってるって答えたから間違いないと思うが」

(うわぁ、それでよう無事やったな)

(ここにいるという事は襲われなかったか、撃退したかですけど)

「それでその吸血鬼は名前とか名乗らなかったの?」

今までほとんど空気だったいつきが聞いてくる。

「言っただぞ。確か……え、えは……えはんじえりん？」

「「なあっ!?!?」」

その反応にビクツと体を震わせる忍といつき。

声を上げた二人は驚きの表情で固まっている。

「その方、エヴァンジェリンと名乗ったんですの!?!?」

復活するや否やまたしても声を張り上げるアディリシア。

「お、おう」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル……忍、ほんまよう
無事やったな」

穂波は呆れたと言わんばかりの表情だ。

「別に襲われたわけじゃないからな。ところで、そんなに驚くような奴なのか？」

「…… “闇の福音”（ダーク・エヴァンジェル）・ “人形使い”（ドール・マスター）・ “不死の魔法使い”（マガ・ノスフェラトゥ）など数々の異名を持ち、600年の時を生きる真祖の吸血鬼にして最強クラスの魔法使いですわ」

「補足するなら、女子供を除いて結構な数の人間を殺しとる。今は失効になつとるけど当時はかなりの賞金も掛けられとつたと思うで」

「「「「「「「」」」」」」」」

あまりの内容にいつきと二人で言葉を失う。

「もし、もしあなたが吸血姫と戦うことになったのなら私を呼びなさい。力をお貸ししますわ」

そう言うアデイリシアの顔には余裕が満ち溢れていた。

「……アデイリシアさんだけじゃないよ。アストラルも全力で協力する。ねっ穂波！」

「そうやね。少なくとも一人で戦おうなんて思わんように」

いつきは友のためにと決意の表情を、穂波は心配だとも言うような表情をしている。

「……………あぁ、ありがとう!」

共に闘うと言ってくれた友たちに心から感謝し、忍はアストラルを後にした。

（もしさっきの話が本当なら子供たちにも害が及ぶ。確かめてみるか）

今一度吸血鬼と会うべく行動を開始する。

さて今の忍の状況を一言で表すと、迷子である。

ひとまず最初の桜並木を見に行こうということに向かっていった。

（おかしい。前こんな道通らなかったはず）

「ま、まさか・・・道が作り変えられた!？」

こいつ認めねえ気だああー!?!?

↳一時間後↳

「・・・俺、方向音痴だったのか」

地面に両手と膝を着いて打ちひしがれていた。

忍のまわりだけ曇ったかのように暗く、ずーんという文字が浮

かんで見える。

今いる場所はいかにも路地裏というような場所だ。

どうしてこんな道に迷い込んだのか本人にも分かっていない。

「はあ、どうやって……ん？複数の人の気配、近いな」

忍が気配の方向に向かって進んでいくと、そこには大きく開けた場所になっていた。

そしてその中心あたりで、耳のあたりに大きな飾りを付けた少女と大きな杖を持つ少年&いつも新聞を届けに来る少女がにらみ合っていた。

（あの子、いつも新聞を届けに来る女の子？……険悪ってほどでもないが、良好な雰囲気ってわけでも……って戦い始めたし！？）

杖&新聞コンビ（？）は新聞少女が前衛で杖少年が後衛のオーソドックスなタイプ。

（うお！？速いつ！……魔法？てか、良く見ると後ろの杖持った奴もろに魔法使いじゃないか。二対一……きついな、止めるか）

神聖な決闘かもしれないため、止めるかどうか迷っている間に戦況が大きく変わる。

新聞少女は動きこそぎこちないものの、スピード・パワーともに申し分なくロボ少女の動きについて行っている。

ロボ少女の前に構えていた左腕を自身の右腕で上へと弾き、左手で額にデコピンを食らわせた。

そこでロボ少女に致命的な隙が生まれた。

後ろで魔法を詠唱していた杖少年がその隙を突き魔法を発動する。

「魔法の射手、サキタ・マキカ連弾・光の11矢!セリエス・ルーキス!!!」

放たれたのは十一本の魔法の矢。

その全てが無防備な少女へて向かう。

「……すみません、マスター。もし、私が動かなくなったらネコのイサを……」

避けられないと悟った少女の漏らした一言が踏みとどまっていた忍

の耳に届く。

「っ！？バカ野郎がつー！」

忍の中で何かが弾けた。

今少女へと迫る魔法の矢は明らかに致命傷となりうる威力を秘めている。

状況がどうのは今忍には関係ない。

今あるのは全力で少女を助けることだけだ。

最大速度をもって魔法と少女の間へと身体を入れる。

突然の乱入者。

二人の少女は突然の事態に思考が着いてきていない。

唯一理解できた少年は、己がその放った魔法の威力が分かるため表情を絶望へと歪ませていく。

「だっだめ！？戻ってー！？」

少年は叫ぶ。

しかしすでに時は遅く、すべての魔法の矢が忍へと突き刺さる。

吸血鬼と戦いの火種（後書き）

やっと主人公がネギ少年と出会いました。

でも読み返せば読み返すほど前半のネギ少年は突っ込みどころが満載ですね。

あとカモ（笑）をどうしようか、かなり悩んでいます。

あれがある意味諸悪の根源です。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

分かり合うために

「だつだめ！？戻ってー！？」

少女を庇いその背中の一一本もの魔法の矢が突き刺さった。

その背からは大量の血が流れ出ている。

これが魔法使いならここまでひどい怪我にはならないだろう。

魔法使いたちには少なからず対魔力が備わっており、無意識化で魔法を軽減する。

しかし、魔法など知らない忍に対魔力などあるはずがなく。

決して倒れず動かず少女を守りきった忍の背中は痛々しい。

「ふう・・・怪我は、ないか」

「は、はい私は何ともありません」

「そうか・・・よかった」

忍に守られた少女に怪我は無く、明らかに庇った忍の方が重傷であ

ろう。

しかし、そんなことはおくびも出さず、その目は優しい。

「えっあの、僕は………」

「うそ……あの人、なんで!？」

(や、やべえ!?!もしかしてこれ、俺っちがアニキを焚きつけたせいか!?)

それぞれ、自分の行動で無関係の人物に怪我を負わせてしまったこと、目の前で怪我を負っているのが見知っている人物であったこと、それが二人の心情をかき乱す。

諸悪の根源たるエロオコジョも少年の背中で震えていた。

そこに追い打ちを掛けるかの様に忍が言い放つ。

「少年。もしまだ戦うというのであれば……俺がお前を叩き潰す!」

叩きつけられる殺気と途方もない重圧。

ただ睨まれているだけでありながら体が重く息苦しくなり、知らず知らずのうち二人(+一匹)は呼吸が荒くなっていく。 知ら

「ああ・・・あああああああああああつあつあああ！！！！」

しばらく苦しそうにしていた少年だったが、まるで逃げるかのように走り去って行った。

魔法を放った少年は自らの犯した罪と、忍から叩きつけられた殺気に耐えきれなかった。

これに引きずられるかのように同じく少女も去っていく。

残されたのは二人。

「今は道具がありません。近くに家がありますので、そこで傷の治療を行います」

そう言って少女は忍に肩を貸す。

命にかかわるほどではないにしても怪我は決して軽くない。

そのため素直に肩を借りる。

「すまないな。礼を言っ」

「何を言いますか。お礼を言うのはこちらです。さあ行きましょう」

二人はその場を後にした。

「で………なんでこいつがここにいるっ!!!!??」

現在、忍がいるのはエヴァンジェリンが居を構えているログハウス。

ロボ少女 絡繰茶々丸に案内されてたどり着いたのがここだ。

中はファンシー（少女趣味）な人形が所狭しと並んでいる。

多くの人形が飾ってあると人によっては不気味に映るものだが、こ

の家の人形はどれも趣味がよく、そういう印象とは無縁となっていた。

「そういうお前は何でここにいる？」

「こ・こ・こは・私の・家だあー！！！」

「おお・・・お邪魔してます」

ぺこっと頭を下げる忍。

ログハウスへと案内された忍はすぐに茶々丸に治療をしてもらうことになった。

幸い見た目こそ酷いものの、それほどの大けがというわけでもなかった。

忍が日ごろから鍛えていたためこの程度で済んだわけだ。

一番ひどかったのは出血で血を多く流したことだった。

で、治療も済み、茶々丸が淹れてくれたお茶を飲んでいる所に、エヴァンジェリンが帰って来て現状に至る。

「ん？このお茶、美味しいな。渋みがいい塩梅だ」

「ありがとうございます。それは静岡の高級茶b」うがーーーー！
「！……どうされましたマスター？」

「だから、どうしてこいつがここにいて、こんなに寛いでいるんだ。
おかしいだろうがっ！！？？」

「……そんなに叫んで疲れないか？喉痛くないか？お茶、いるか
？」

お茶をそつと差し出す忍。

「iiiiiiiiいかげんに………しろおおおー！！！！？
??？」

（状況説明中）

「……なるほどな、茶々丸が世話をかけた。礼を言うぞ、虫取り
少年」

感謝の言葉に嫌味が混ざっている。

「ここは素直に受け取っておいた方がよさそうだ。あと、俺は虫取り少年ではない」

「そうかそれはすまなかつたな、虫取り少年」

「なに構わんさ、チュパカブラ」

「……………!!(メンチの切り合い)」「」

「お二人は仲がよろしいんですね」

まったくもって見当違いの反応をする茶々丸さん。

「「どこがだ!?!」「」

「ふう、とにかくだ。用事が無いなら早く帰れ、虫取り少年。シッ
シッ」

猫でも追い払うかのように手を外に向けて振る。

「まだ言うか、いいかげんくどいぞ。それとちよつど俺はお前に用がある。それを済ませてから帰らせてもらつ」

腕を組んで俺帰りません、のポーズ。

「ちつ、厄介な。仕方がない、要件とやらを聞いてやる。そしたらすぐに帰れ！」

「承知した」

「あつ、お茶入れ替えますね」

忍のお茶が空のことに気がついていそいそと準備を始める茶々丸さん。

「濃いめで頼む。やはりお茶は渋いぐらいでないとな！」

「うおおおおー……い……!?…?…?」

「・・・要件を言え」

少しお疲れ気味のエヴァンジェリンと、後ろに控えて心なしか活き活きしている茶々丸。

「お前が60000年生きて、600年だ！多すぎるわ!？」・・・
600年生きた吸血鬼だと聞いた。今まで多くの人間を殺してきたとも」

「・・・」

「その上で聞きたい。今回の吸血鬼騒動、なぜこんなことをしている?」

忍には先ほどのようなふざけた様子はなく、ただ真摯に真剣にエヴァンジェリンを見つめる。

「ふんっ！そんなことを聞いてどうするつもりだ？正義の味方よろしく私を倒すか!」

「・・・お前がこれ以上何の関係もない一般人を巻き込み続けると

「いつものなら、それすらも辞さない」

その目に映るのは覚悟。

大切なものを守るため、その力をふるう覚悟の目だ。

「・・・魔力を集めていたが、もう集まった。これ以上はやるだけ無駄だ」

「ならもう被害はでないんだな？」

「少なくとも吸血行為をするつもりはない」

その言葉に少し安心したのか忍から険がとれる。

「そうか、ならある程度落ち着いたら襲った子たちに謝りにいけ。直接が無理なら何らかの形で謝るようにしろ」

「なっ何で私がそんな」 「いいな！」 「くううう」

さすがに忍の言葉に反論しようとしたが、真剣かつ本気の視線に否定できなくなる。

「ええええい！分かった何らかの形で謝罪する！これでいいだろう！？」

そっばを向きつつ少しバツが悪そうに話すエヴァンジェリンの様子に、忍は一つの確信を持った。

「お前、いいやつだな」

「はああ！？何を言っているんだお前は！？私は吸血鬼で人殺しで、化物だぞ！？それを知っているお前がどうしていいやつなんてことになるんだ！？」

「そういうが、じゃあお前は今まで無差別に人を殺してきたのか？違うだろう？大方殺さないと殺されるような状況だったんじゃないか？」

「・・・少なくとも一人は明確な殺意を持って殺している」

最初の一人、すなわちエヴァンジェリンを吸血鬼へと変えた者を殺意を持って殺している。

「そうか、ならやっぱりお前は化物なんかじゃない」

忍はエヴァンジェリンの頭に手を乗せた。

「どうしてだ！？私は・・・あっコレやめろ！？」

忍は頭の上に置いていた手で頭を撫でていた。

「・・・本当の化物っていうのは、笑いながら人を殺せるような外道のことだ。それに比べて、そんなつらそうに話すヤツが化物なわけあるかよ」

「・・・」

頭を撫でていた手を止めまっすぐエヴァンジェリンの目を見て言い放つ。

「お前の過去に何があつたかは知らないし、聞こうとも思わない。だがもしお前一人じゃどうしようもならない事にぶち当たったなら、迷わず俺を頼ってこい！！！」

「!?!」

「俺は不老不死とかじゃなからな。歳もとるし死にもする。いつまでもお前を助けてやることはできないだろう。だけど、俺が生きている間は“お前の味方”なってやる!!」

（なんなんだ、こいつは！？誰もが恐れ、蔑んできた私の味方になるだと！？）

「お前は怖くないのか！？この私が！」

「こうして話す前なら恐れていたかもしれない。だがお前と話し、人となりを知った今、何を恐れる必要がある！！」

嘘偽りのない真っ直ぐで正直な言葉。

温かい太陽のような光が冷たく凍った彼女の心を溶かしていく。

忍の目につづるのは、恐怖でも同情でも侮蔑でもなく、友愛。

不覚にもエヴァンジェリンは涙を流しそうになった。

（私にもまだ、味方になってくれる者がいる。助けってくれる者がいる！）

「ふんっ……これから私のことはエヴァと呼べ！」

エヴァンジェリンが今示せる最大ともいえる信頼の証。

（今はまだこれだけしか示すことができないけれど、いつかきっと……）

「ああ、これからよろしくな！エヴァ！」

「行ってしまったな」

どこか寂しそうで、しかしその顔は晴れやかだ。

「マスター、嬉しそうですね」

そういう茶々丸は至って無表情だが、なぜかその顔はニヤニヤと笑っているように見えた。

「ええい！そのニヤニヤをやめろ！？」

真っ赤になって茶々丸の頭のネジを回し始める、エヴァンジェリンの姿はとても楽しそうだった。

「いけません。そんなに巻かれてはあああ……あ」

「ところでマスター。喉が枯れているようですが・・・」

「・・・あれだけ叫べば誰だって枯れるわ!」

分かり合うために（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回はエヴァ救済ルートということで進めました。
今までの話で一番良かったんじゃないでしょうか。
私的には書いてて一番楽しかったです。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

吸血鬼と魔法使い

「魔法って俺にも使えるのか？」

「・・・なんやろ？こんなノリ前にもあつた気がするわ」

またしてもアストラルに来ている忍。

ひとまず魔法関係のことはここでしか聞けないのと、なんだかんだ言つて近いので足繁く通つていた。

と言つても昨日来たばかりだったのだが。

「びっぞ」

「ありがと。そう言えばまだ自己紹介をしていなかったな。俺は流動忍、よろしく頼む」

「はい、私は黒羽まなみです。よろしくお願いします」

長い黒髪を揺らしながら、丁寧に挨拶を返すこの少女もまた、アストラルの社員（見習い）である。

どこにでもいそうな、だけど見ていただけでどこか和ませてくれるような少女だ。

まあ・・・身体中が半透明に透けていてかつ、浮かんでいることを除けば、だが。

所謂、幽霊というやつである。

普通ならそれだけで恐怖しそうなものだが、忍は至って普通だった。

(普通なんらかのアクションを起こすものだけど、さすがに完全スルーは予想外だった)

(忍ってもしかして怖いもんじゃないかな?)

(何とも忍らしい反応ですわね)

上からいつき、穂波、アデイリシアの反応。

というかまたしても普通にいるアデイリシアさん。

「それで、練習とかすれば魔法って使えるものなのか?」

「ある程度才能があれば使えますわ。ただ特殊な魔法とかになる話
は変わってくるので、使えたとしても西洋魔術になるでしょうが」

「とは言つても、西洋魔術もある程度適正は必要やからな。とりあ
えず調べてみようか?」

「よろしく頼む」

（検査中）

「まあ結論から言つと・・・」

「「適正〇）ゼロ（やね）ですわね」「

ばっさりと切り捨てられる忍。

「西洋魔術問わずいろいろ調べてみましたが、見事なまでに全てゼロ。魔法との相性最悪です」

追い打ちをかけるアディリシア。

それを聞いたいつきが忍の肩にそっと手を置き、悟ったかの様に頷いていた。

その行動がよほど気に入らなかったのか、忍のブローがいつきへと突き刺さっていた。

「はあく。結局魔法は使えないのか」

「そもそもどうして魔法を使おうと思ったんですの？」

忍が魔法を使おうと思った理由に興味を持ったのか、アディリシアは手に持っていた紅茶を置いて訊ねた。

「ふむ、実は昨日エヴァンジェリンに会ってきてな」

「「「はああああ!!???」」」

驚愕の表情の三人。

まなみ一人状況がわからずこてんと首を傾げていた。

「いきなり大きな声を出すと驚くだろう、俺が」

少し非難めいた目線で忍は三人を見やる。

「驚いたのはこっちですわ！？昨日あれほど言ったのにどうしてその足で会いに行けるんですか!？」

分りやすいほど怒っているアディリシア。

対照的に少し落ち着いたのでか穂波が聞いてくる。

「それで、どうしてそれが魔法を使いたい繋がるん？接点があるのやけど」

「戦う時のために魔法を覚えておきたかったとか？」

「いや、あいつと戦うつもりはない。むしろ味方をすると決めただ。だったら魔法が使えた方がいいだろう？」

「ど、どうして吸血鬼の味方を？」

本人にそのつもりはなかったが、いつきのエヴァンジェリンを非難するようなものいいに、忍が不機嫌になっていく。

「いつき、お前はエヴァが吸血鬼であるというだけで悪と断罪する
のか？」

「えっ、あの・・・」

「確かに吸血鬼は普通の人間とは違う。だけど、それを理由にエヴァを悪と決め付けるのだけは断じて許しはしない」

忍の言葉を聞き皆が息を呑む。

そんな中アデイリシアだけが、なぜエヴァンジェリンの味方をする
と決めたのかを理解した。

「・・・なるほどそういうことですか。確かにそれなら、忍の判断
も頷けますわ」

「エヴァは生まれつき吸血鬼だったわけではないそうだ。十歳の誕
生日に吸血鬼にされたらしい。それ以降各地を転々としていたが、
吸血鬼であると知れるや否や問答無用で襲撃にあったそうだ」

「「!？」」

「そうしてそのたびに迎撃。するとさらに悪評が広まり襲撃に合う。
それを繰り返しているうちに、指名手配犯の出来上がりということ
ですか。まるで負の連鎖ですわね」

エヴァンジェリンが吸血鬼になった時、彼女は戦うことすら知らない女の子だった。

それがいきなり吸血鬼にされたあげく、同じだったはずの人間に追いついてられ殺されかける。

その苦悩、絶望は計り知ることできないものだろう。

誰にも心を許すことができず、周り全てが敵であったのだ。

だからせめて自分でも彼女の味方でいようと、忍は誓ったのだ。

人に絶望しながらも、それでも人と関わることをやめなかった優しい少女のために。

歩み寄ることはできないかもしれない。

分りあうことは難しいのかもしれない。

それでもせめて自分だけは手を差し伸べてあげられるように。

間違ったことをしたら叱って、いいことをしたら褒めてあげられるように。

だから……。

「だから、俺はあの子の味方でありたい」

（本当にまっすぐな人ですわね。だからこそ助けてあげたいと思えるのです）

忍を見るアディリシアの目はとても暖かい。

口には出さないもののここにいる者の心は一つだった。

エヴァンジェリンの知らないところで味方が増えた瞬間だった。

忍がエヴァンジェリンの味方をする決めてから数日が経った。

そして、現在の時刻は夜の八時。

この日は学園都市全体がメンテナンスのため停電になる。

時間的にはまだ寝静まるには早いものの、街灯は消え学園は静寂に包まれていた。

外出が禁止される中、学園の外へと通じる橋を見渡せるビルの上に一人の青年が降り立った。

全身真っ黒の外套を身に纏うのは流動忍その人である。

以前の戦装束の時とは異なり、自身の身を隠すためにつくられたそれは隠密行動に適している。

一番の特徴は何と言ってもその仮面であろう。

全体でその仮面だけが白く、まるで仮面だけが浮いているようにすら映る。

なぜこんな時間に忍がいるのか。

その答えは、今日がエヴァンジェリンとネギ・スプリングフィールドの決戦だからだ。

今回の戦いに忍は一切手を出すつもりはない。

エヴァンジェリンもそれを望んでおり、今回は魔法使い同士の戦いをその目で見ておくためにこうして出歩いている。

戦いはすでに始まっていた。

何かの思惑があるのか逃げに徹するネギと追いかけるエヴァンジェリン。

ネギは何やら銃のようなものをエヴァンジェリンに向かって撃ちながら橋へと向かっていく。

「魔法使いとはああも自由に空を飛べるものなのか」

その戦い方は忍にとっては想像もつかないものだった。

「これは見に来て正解だな。魔法使い・・・俺にとっては天敵になりうるか」

そうこうしている内に二人の魔法使い（+茶々丸）は橋の上で対峙していた。

一歩一歩エヴァンジェリンがネギに近づいて行ったその時。

パシィィン！

一瞬の閃光のあと、エヴァンジェリン達の足元に魔法陣が現れ幾重もの光の帯が二人を拘束した。

（あんなことまでできるのか！？）

忍にとってほぼ初めて魔法使いらしい戦いを目に見しているため、驚きの連続になっている。

二人の拘束に成功したネギは何やら飛び跳ねて喜んでいたものの、茶々丸によってすぐに結界が破壊され今は目に見えて慌てている。

（これは勝負あつたかな）

忍が決着を予感したその時を狙い澄ましたかのように橋を爆走してくる少女　神楽坂明日菜。

アスナを止めるべく前に出た茶々丸をエロオコジョ　カモの手助けによりスルー！。

さらにはエヴァンジェリンの張った魔法障壁を軽く突破しとび蹴りを食らわした。

このとび蹴りには忍も驚きを隠せない。

（なんて切れのとび蹴りだ！あの年であれだけの技巧・・・日本、いや世界を狙える！？）

その後の展開は正に怒涛だった。

それぞれの魔法使いを背に戦う二人の前衛。

そして砲台と化した魔法使いたちによる魔法合戦。

大分手加減をしているとは言え、それについて行くネギもさすがと言える。

そして、それぞれ最後の一撃。

「ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス闇の吹雪！！！！」

「ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス雷の暴風！！！！」

打ち出された同種の魔法による大激突。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さすがに忍も絶句していた。

決着の時。

僅差でを打ち破ったネギの魔法が、エヴァンジェリンに直撃する。

なぜだか服だけきれいに吹き飛ばしてほぼ無傷。

忍がホッと息を撫で下したが、ここで茶々丸の必死の叫びが耳に届く。

それと同時に停電が復旧。

再び魔力の封印がエヴァンジェリンを襲い、魔力を失って海へと落ちて行く。

「なにっ！？遠い！間に合うか!?!」

一瞬の判断で橋へと向かう忍だが、どう考えても間に合う距離ではない。

が、今まで闘っていたネギが杖を呼び寄せエヴァンジェリンを助け

出した。

何事もなく、終わってみればそう悪い結果にはなっていない。

何やら最後に二人が言い争いをしていたがそれすらも険悪なものとは程遠い。

忍はそれに満足し、静かにその場を去って行った。

その背に一瞬だけエヴァンジェリンの視線を感じた。

帰った忍を待っていたのは、管理局の白い悪魔も真っ青な千鶴の笑
顔だったとさっ

吸血鬼と魔法使い（後書き）

いかがだったでしょうか？

後半少かなり駆け足気味でしたが、これ＋1話で吸血鬼篇が幕になります。

修学旅行前にオリジナルを入れていくつもりです。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

戦いの終わりに・・・

「おはようございます。エヴァンジェリンさん！」

「む、ボウヤか。一体どうしたんだ、こんな朝早くに神楽坂明日菜なんかを連れて」

昨日橋の上で決戦を繰り広げた四人が一同に会している。

場所は麻帆等学園女子校エリアと駅とを繋ぐメインストリート。

毎朝多くの生徒が行きかう通りだが、この日は行き交う人はまばらだ。

学園が休日ということもあり、すれ違うのは部活へと赴く生徒が大半だろう。

同じように駅へと向かうものもいるもののその数は極端に少ない。

「ちょっと、エヴァちゃん！なんかって何よ！なんかって!!」

「で、どこに行くんだ？」

「無視するなあぁー!!」

とても騒がしい。(主に明日菜)

「・・・この前茶々丸さんを庇った人のところですか」

明らかに落ち込みモードに入るネギ。

自分のせいで怪我を負わせてしまった者に会いに行こうというのだ、それも無理ないだろう。

「忍の元にか？しかしお前たち、あいつがどこにいるのかわかるのか？」

「知ってるわよ」

こともなげに答える明日菜。

と、明らかに不機嫌になるエヴァンジェリン。

「ってなんでそんな不機嫌になるの？」

「マスターでも知らない忍様の居場所を知っているアスナさんに嫉妬しているのです」

さらっと爆弾投下。

「うおおい。茶々丸。悪いのはこのくちか!?!?くちなのか!?!?」

「いふあいです、わふたー」

真つ赤な顔で茶々丸の両頬を引つ張るエヴァンジェリン。

「……つと、ネギ!急がないと」

「……あつ!えつと、僕たち急いでいるのでこれで失礼します」

時計を確認したネギと明日菜は、未だじゃれ合っている二人の放置を決定。

当初の目的地へと歩を進めようとした。

「待て、私も行く」

「「えっ!?!」」

突然のエヴァンジェリン参入に驚く二人。

「でも用事があったんじゃない」

「いいえ、マスターと私は朝の散歩をしていただけなので問題ありません」

「ほら、何をしているさっさと行くぞ！」

こうして四人は一同、忍の元へと向かって行った。

「本当にここに忍がいるのか??」

ものすごい疑惑の眼差しでネギを凝視する。

「そ、その・・・僕も知らなくて。どうなんですか、アスナさん！」

「間違いなくここにいるわよ。と、噂をすれば・・・」

四人の視線の先には手に大きな洗濯かごを持ち、足元でちよろちよろしている子供たちを器用に避けている忍の姿があった。

なぜか首に《私は悪いことをしました》という札をかけて。

その姿をみたエヴァンジェリンはどこか嬉しそうで、茶々丸はやっぱり無表情。

対称に、ネギは恐怖からか体を震わせており、明日菜は緊張で固まっていた。

そんな異質な集団に忍はすぐに気づいた。

「お前ら、こんなところで何をしている？」

「悪いな、洗濯ものを干すのを手伝ってもらって」

「何、気にするな。暇だったから手伝ったまでふぁ！？なにをすう！？」

「お前は何もしてないだろうが！」

今度は忍がエヴァンジェリンの頬を引っ張っていた。

「あつ、あの！」

「なんだ、少年？」

今の忍からはネギたちが以前の会った時のような殺気は感じられない。

「えっと、ネギ・スプリングフィールドと言います。この前は本当にすみませんでした！！」

ネギはまるで頭が地面に着くんじゃないかというぐらい、深々と頭を下げた。

「私は神楽坂明日菜って言います。私もこいつと一緒にあってあんなこととしてごめんなさい!!」

明日菜も同様に頭を下げた。

その様子を黙って見ていた忍が二人に声をかける。

「頭を上げる、まずこの前のことを謝りに来たということ間違いないんだな？」

「はい」

一つ頷いた忍は今度は茶々丸へと視線を向ける。

「この二人は君にきちんと謝ったか？」

「はい、お二人揃って謝りにきてくれました」

その答えに満足した忍は二人の頭にげんこつを叩きこんだ。

「痛い!?!」

「これでこの間の件はチャラだ」

そう言っつて二人を撫でる。

はじめ何を言われたのか分からなかった二人だったが、落ち着いてきたのかやっつと内容が理解できたようだった。

「「ありがとうございます!」「」

「ネギ、この前のことで理解できたと思うが君の力は簡単に人を殺めることができる」

「はい。忍さんに僕の魔法が当たって、血だらけの背中を見たときやっつと理解できました。何も知らずに魔法を使うことの怖さを」

「そうだ、ボウヤ。確かに魔法は便利なものだ。しかし同時に多くの危険を孕んでいる」

そういつて笑うエヴァンジェリンはとても楽しそうだ。

（それを学べたボウヤは幸運だったな。いや、忍が学ばせたのか）

「常に自身の持つ力について考え続ける。何も知らず、何も考えず、ただあたり前のように使おうとするな」

（僕は魔法を使えるようになれば、父さんのような立派な魔法使いになれると思ってた。でも違うんだ。大事なのはそこじゃなかった！）

（私はネギを助きたい一心だったけど、もう少して大切なものをなくすところだった。考えないとだめなんだ、この力でどんなことができるのかを！）

ネギと明日菜は思考する。

忍の言葉が二人を一段上の高みへと押し上げた。

（少しはましになったようだな。しかし、忍もお人好しというかなんというか）

若干の呆れを含めながらも嬉しそうなエヴァンジェリン。

「自らの力に責任と覚悟を持って！そうすれば・・・お前たちは道を踏み外すことはないだろう」

「はい！！！」

ネギたちが去って行った後、エヴァンジェリンが忍に話しかける。

「このお人好しめ。自分を殺しかけた相手に何アドバイスなんてしてるんだ」

「別にそんなんじゃない。ただ覚悟もないまま力を使い続ければ、必ずどこかで取り返しをつかない間違いを犯す。あの子たちにそんなものを背負わせたくはない」

「マスターは、それがお人好しだと言っているんだと思いますが」

「むう」

いつしか太陽は天高く。

歩く人々の顔も楽しげで、足が自然と弾みだす。

「どうせだ。二人とも昼飯を食っていくといい。今日は俺の自信作だ」

周りに笑顔が咲き誇り、はしゃぐ子供は早くとせかす。

「それは楽しみだ。だがいい加減なものを出したら承知しないぞ」

「マスター。顔がニヤけています」

だからどうか

「食い終わったら子供たちの世話、してもらっぞ」

こんなにも暖かい日々が、ずっと続きますように……

戦いの終わりに・・・（後書き）

いかがだったでしょうか？

ここまでがとりあえず第一部完つてところでしょうか。
というわけで次から少しオリジナル。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

邂逅の先に何を見るか

早く、もっと早く

遠く、もっと遠く

森を抜けて、その先へ

太陽の光すら遮るような、薄暗く深い森。

鳥の鳴き声が不気味に響き、獣の鳴き声が恐怖を誘う。

五感すべてがマヒするかの様な濃密な緑。

生い茂る木が行く手を阻み、這い出た木の根が足を取る。

その中を駆け抜ける小さな影。

焦りからか、恐怖からか、それとも別の何かからか。

追い立てられるかのように走り続ける。

一心に森の外へと。

早く、もっと早く

遠く、もっと遠く

森を抜けて、その先へ

どうかこの先に、救いがあるように……

「スーパーの特売……たまご……そして何より、トイレットペーパー!!!」

周りを行く人がもの見事に忍を避けていく。

現在忍は開店前のスーパーに向かっていた。

(勝負の日。甘え、妥協は許されない！何としても勝利し、この手に全てを掴む！！)

ぶつぶつ何かを呟きながら、突然空に向かって拳を突き上げる忍。

その行動、すでに通報アウトです。

「と、いけない時間は有限だ。迅速に行動し、目標を確保！タイミングを逃せば全ては無に帰す。その前に最終確認だ。財布は……」
「やれやれといった様子で確認のために財布を取り出す。

今にして思えば、この行動こそすべての原因だったんだ

全ての事象に“偶然”はなく、あるのは“必然”のみである。
誰が言ったかは分らないが、それが事実だとするのなら、今目の前で起こっているこれも偶然ではなく必然なのだろう。

ならば、目の前で財布を奪われ、それを持って走り去っていく小さな影を追いかけるのもまた必然と言えるのではないだろうか。

「っ！！！？？待てやあ、コラあああああ！！！？？」

一瞬のフリーズから立ち直った忍が修羅の形相で影を追う。

突如横の森から現れ、財布を奪っていった小さな動物。

この時、もし忍が冷静だったのなら気がついていただろう。
この影がまるで、忍を何処かに誘導するかのように動いていたこと
に。

「・・・見失った」

影を追うことに夢中になっていた忍が正気に戻った。

状況を確認しようと周りを見渡したところで固まっている。

「なぜ森にいるし。一体ここはどこだ？」

はい、迷子になりました。

ただでさえ方向音痴な忍にとって知らない場所は鬼門となる。

人がいればなんとでもなりそうだが、見渡す限りに人影はなく。

ただあるのは鬱蒼と生い茂る樹木。

「酸素が濃いな。酔いそうだ」

生命力が強く息づく森の中にあつて、さらにここは空気が濃い。

そしてそれは必ずしも良いこととは言えない。

酸素にしても人体に必要な要素ではあるが、過剰摂取は悪影響を及ぼす。

ここは普通の人が生きていくには濃すぎるのだ。

「財布を盗まれた上に森の中で遭難する……不幸だ」

つんつん頭の到る所でフラグを乱立する男のような口調になっていた。

「はあ……。……んっ？」

大きなため息とともに下を向いた忍だったが、不意に動きが止まる。

どうやら地面に何かを見つけたようだ。

「これって血か？人間のものだな。しかも乾ききっていない」

よく見ると血が点々と道を作っていた。

何らかの理由で怪我をした人間が、血を滴らせながら歩いて行ったというところだろう。

血が新しいことと、そして血の量が決して少なくないことから、恐らくこの人物はそんなに遠くへは行けていない。

放っておくと生死にかかわる可能性もある。

「どちらにしても放っておくことはできない」

早急にそう結論づけた忍は血の先へと足を進めた。

結果から言うなら、血の主はすぐに見つけることができた。

少し進んだ先に大きく開けた場所があり、その外周を覆うようにして生えている樹の一つにもたれかかっている。

しかも忍から財布を盗んだと思われる動物もいる。

「お前さっきの・・・」

見た目は子ぎつねと言ったところだろうか。

身体は白と銀の中間のような色に覆われており、金色に光る目が忍を見つめる。

少し警戒しながらも、その目は何かを必死に訴えている。

(あのきつね、後ろにいる人間を守るようにこっちを見てる。なるほど怪我してるのはあいつのご主人様ってわけか)

「お前、そいつを助けたくて俺をここに連れて来たってのか」

忍はここに来てこのきつねがどうして財布を盗んだのかを理解した。自分の大切なものを守るために必死で助けを呼びに行ったのだ。

よく見るときつねの足は泥だらけで、全身は木の枝で引っ掻いたような傷が到る所についていた。

忍はゆっくりと近づいて行く。

そして小さな功労者の頭をゆっくりと撫でた。

「よく頑張ったな、立派だ」

忍のことを信頼したのか、緊張の糸が切れたかのように気を失った。

突然意識が無くなったので心配した忍だったが、眠っているだけだと分りそつと木の影に寝かせ、改めて怪我人を見る。

年は20歳ぐらいで、100人見たら100人全員が美人と答えるぐらい、整った顔立ちをしている。

黒い鎧のような胸当てを身につけ、ミニスカートの下に黒タイツ着た女性だ。

そのスカートのまわりをマントのような布が覆っている。

さらに全身を包むような大きなローブを身の纏っていた。

青みがかった髪は背中の中間あたりまで伸びており、呼吸に合わせて揺れている。

足元は走りまわったためか泥で汚れていた。

その傍らには人の胸ぐらいの長さのモノが布に巻かれた状態で置かれていた。

中に何が入っているのかはさすがに判別できない。

「つと！見とれている場合ではないな。怪我は右腕か・・・なんだこれは！？何かで引っ掻かれたような傷跡だな。しかし普通の動物にしては切り口が奇麗すぎる。鋭利な刃物で切られたという方がまだ説得力がありそうだが」

血を多く流したためか顔色が悪い。

現在は気を失っているようだが、今のところ命に別状はないだろう。

そう結論づけた忍だったが、あいにくと治療に使えそうなものは持ち合わせていない。

「とりあえず傷口に菌でも入ったらまずい。水で消毒を」

常に持ち歩いていたミネラルウォーターを使い傷口を洗い流し、ハンカチで覆う。

応急処置程度にしなければならないがしないよりはましと判断した。

(しかし、どうしたものか・・・ふむ)

「・・・何か近づいて来ている。いい感じは・・・しないな」

ゆっくりと目を閉じ、ふうと一息を吐くと忍の雰囲気が変わる。

忍にとっては一つの儀式。

日常から闘争へと思考を切り替えるためのもの。

全神経を研ぎ澄まし、己の身体を支配下に置く。

森の中にあつて分かる、明確なる殺意。

それは確実に忍たちに向けられている。

この様子から戦闘は避けられないものと判断し現状の確認をしていく。

(敵は未知数。こちらは守るべきものが二つあり、どちらも気絶中。正直分が悪いが、この程度を乗り切れなくてどうする!)

自らに喝を入れ奮い立たせる。

やるべきことは単純明快。

襲ってくるものを打ち倒し、この二人を守ること。

シンプルなのはいいことだ。

余計なことに神経を使わなくて済む。

ならば

「さあ、こちらの用意は万全だ。尽くかかってこい！！」

忍の声に反応するように森を抜けてくる10もの異形。

所謂、悪魔。

ヒトの呼び出しに応じ召喚された、理から外れた者たち。

大きさも形も統一性がないが、すべてに共通しているのはその狂気に染まる瞳だろう。

その目には等しく、目の前の獲物を狩ることしか映ってはいない。

森を抜けてくると同時に襲いかかる。

その一体一体を的確にさばっていく忍。

しかしその表情は困惑の色が大きい。

(こいつらの動き、全く読めない。不規則過ぎる!?)

一体を相手にする分には対して苦にはならないと忍は考える。

問題なのは状況。

忍一人に対して襲い来るのは悪魔十体。

さらに忍の後ろには意識のない者がおり、悪魔たちは執拗にそちらを狙う。

また、一体一体の動きが読めず、忍の動きが鈍り、後手へ後手へと追いやられる。

正に悪循環だ。

「何なんだこいつらは!?!」

しかし、それでも忍は一步も退くことはない。

悪魔相手に今までの経験はさして役には立たない。

今忍を動かすのは培われた直感のみ。

爪を叩き折り、牙をかわし、その体に己が拳を叩きこむ。

しかし、それでも悪魔の猛攻は止まらない。

忍が退けた悪魔は四体。

残りが六体。

（死ぬわけではなく消滅。ホントにファンタジーの世界だな）

忍の周りを囲むように展開している。

しかし、

「五体！？一ついない!？」

それは上空にて見下ろす。

顔は歪み厭らしく笑う。

まるで勝利を確信しているかの様に。

口を開き、そこに光が集まり出す。

忍には如何なる攻撃なのかは皆目見当もつかない。

（それでもあれは、受けてはならないと直感が告げている）

忍に避ける術はない。

一人だけならば避けることができたかもしれない。

しかし、その背に背負うは二つの命。

それを投げ出して逃げることは忍にはできない。

背を向けて逃げだせば、残りの悪魔が女性の元に群がるだろう。

（魔法が使えればこの状況どうにかできたんだろうか）

諦めにも似た感情。

しかしそれでも毅然と前を見続ける。

「ここまでのようだ」

「諦めるなッ！！」

忍の元に届く確かな声。

力に満ち溢れた声を聞き、忍が上空を見上げる。

卑しく笑う悪魔の更によ。

そこに一つの影が現れ、笑う悪魔の身体を両断する。

身体を真つ二つにされた悪魔は消滅し、断ち切った影が忍と残った悪魔の間に降り立つ。

その姿を目にした忍は今の現状を忘れ、ただただ震えた。

目の前に立つ者の持つ武。

正しく武人・・・いや、武神というべきであろう。

その姿に、その背中に、久しく忘れていた武人としての血が騒ぎ出す。

“戦ってみたい”と。

「我はゼンガー、ゼンガー・ゾンボルト。悪を断つ剣なり！」

今ここに、二人の武神が並び立つ！！

邂逅の先に何を見るか（後書き）

いかがだったでしょうか？

オリジナルとか言っておいて、よくよく考えたら今までと大して変わっていないことに少し落ち込みました。

とにかく、やっと出せた！！

ゼンガー少佐の口調等はの第二次第三次とOGを再度やり直しながら書いてますが、今後違和感とかがありましたら指摘してください。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

君の声で…（前書き）

投稿したと思っていたらしていなかったため、すごい間があいてしまいました。
すみません。

では、どうぞ！

君の声で…

「我はゼンガー、ゼンガー・ゾンボルト。悪を断つ剣なり！」

忍の目の前に降り立つ一つの影。

長身な体を覆う赤い外套を身に着け、白い髪が風に揺れる。

ゼンガーは背中越しに忍へと目を向けた。

「まだ、戦えるか？」

その試すような視線が忍を捉える。

「当たり前だ」

「ふっ、その意気やよし！」

守るべき者を背に忍とゼンガーが並び立つ。

「流動忍……」

「ゼンガー・ゾンボルト……」

「」「いざっ、参る……！」

動いたのはゼンガー。

手に持った一振り of 刀を持って一番近くにいる悪魔の胴を一閃する。切られた悪魔は自分が何をさせたのか理解せぬまま消滅する。

逆に忍はその場から動くことなく敵を迎え撃つ。

襲いかかる悪魔の攻撃を紙一重でかわし頭を鷲掴みにしたかと思うと、そのまま地面に叩きつける。

二人を表すならさしずめ、剣と盾といったところだろうか。

眼前の敵を斬り伏せる剣と、^{ゼンガー}猛攻からその背にいる者たちを守る盾^{しのぶ}。

二人の前に悪魔など何の障害にもなりえない。

こうしてあっさりと決着はついた。

「助けていただき感謝する。ゼンガー殿」

普段の忍を知る者ならば目の前で起こっていることに目を疑ったことだろう。

よく言えば公平、悪く言えば礼儀知らず。

その忍が丁寧に頭を下げているのだ。

「敬語を使う必要はない、それよりもここに来る途中に小屋があった。まずそこにいくべきだろう」

「それでs・・・いや、そうだな。案内を頼めるか？」

「うむ、こつちだ」

ゼンガーの案内で近くにある小屋へと場所を移す。

ひとまず女性を横にし、備蓄品と思われる毛布の埃を外で落としてからそつと掛ける。

ちなみにきつねの方は移動の最中の目を覚まし、今は忍の頭の上でくつろいでいる。

忍は下そうとしたものの、絶対に下りないと言わんばかりにしがみついていたため諦めた。

一息ついたところでゼンガーが切り出した。

「それでなぜあのような状況になっていた？」

「・・・俺にもわからないことが多いんだ。だから分かっていることだけ説明する」

〈説明中〉

「というのが大まかな流れだ」

頭の上にいるきつねに財布を盗まれたことにはじまり、戦闘に入るまでの粗方を説明した。

さすがに戦っていたモノが何なのかは分からないため保留としてある。

「なるほどな・・・む、起きたか」

と、ここで今まで眠り続けていた女性が目を覚ましたようだ。

「んっつ、痛っ！」

「無理に起き上がるうとするな、傷が開くぞ」

今だきちんと頭が働いていなかったようだが、痛みと忍の一言で完全に目を覚ました。

「ここは、それにあなたたちは誰？」

(どこかの小屋の中ね。二人の男性・・・どちらも見覚えがない。もしかしてアイツの手の者！？ってそれはないわね、なぜかクウが懐いてるし。頭の上にいる意味がよくわからないけど。とにかくこの二人から状況を聞き出さないと)

警戒を解くことなく油断なく状況を確認していく女性の姿に、忍とゼンガーは内心で関心していた。

「ひとまず状況を説明する」

「再度、説明中」

「なるほど、どうやら助けられたようね。ありがとう」

「どういたしまして」

二度にわたって説明をしたため若干忍に元気がない。

「私は、アリア・シュティール。よろしく」

「俺は流動忍だ。で、こっちがゼンガー・ゾンボルト」

二人が自己紹介をする中、ゼンガーのみが一人静かに目を閉じ腕を組み黙っていた。

「それでお前たちを襲っていたアレはなんだ？」

「うん。なんていうか悪魔、が一番正しいのかな。人間の召喚に
応じてこちらに来るのよ」

「それは魔法によるものなのか？」

「なっ！？なんであなた、魔法のこと知ってるの!？」

何気なくいった忍の一言にすごい食いつきを見せたアリアに、忍が少し引いている。

「友人に魔法使いがいるんだよ。それで何でアリアは追われてるんだ？」

アリアの表情が一瞬にして歪む。

それは果たして、悲しみか憎しみか、はたまた怒りだろうか。

「・・・私を襲ってきてるのは、リユーイという男よ。狙いはこれ
ね」

今まで横に置いていた布に目を向ける。

「それは？」

「これは魔術武装の一つで、父の形見にして最高傑作。これをあいつは狙っているの」

「魔術武装？」

「そう。魔法を使う際の媒体であり、それ自体に魔力を流しこむことで特別な効果を発揮するの。あまり出回っているわけじゃないから、魔法使いでもほとんど知らないはずよ。そしてこれは、その中でも更に特殊なの！」

誇らしげに胸を張るアリアだが、忍とゼンガーはさして興味がない様子。

魔法のことを詳しく知らない二人にしてみたら、詳しく説明されても分かるはずがない。

「反応が悪いわね、まあいいわ。それでさっきの話で悪魔を退けたって言ったけど何したの？」

忍の説明を聞き一番疑問に思ったのはそのこと。

一般人が悪魔を退けるなど普通は不可能なものにもかかわらず、アリアたちは全員生きています。

それが不思議でならなかった。

「何をしたって、ぶん殴った」

「ただ斬り伏せただけのこと」

「……………」

（ここは笑うところ？あいつの悪魔を魔法や気すら使えない人間が倒せるわけないし。ああなるほど！隙について逃げ出してきたってことか）

普通に信じられなかったため、逃げてきたと判断したようだ。

「正直そんなに強くはなかったな。いろいろ制約があったから苦戦はしたが」

「……普通の人間なら瞬殺なんだけどね。でもさっき聞いた悪魔の特徴からして、あいつが使役している悪魔の中でも低位に位置するものだろうね。中位、上位の悪魔は次元が違うもの。本能で戦う低位とは違って知性があるから」

「そうだとしても、我らは勝つだけだ」

「そうだな、頭がよかるうがなんだろうが倒すことには違いない」

「ちよつ、ちよつと待って！？あなたたちまさかリユーイと戦うつもり！？」

当たり前のように言う二人を、アリアは信じられないものを見るような目を向ける。

「そのつもりだが？」

逆に忍は何を今更といった様子で、ゼンガーは無音。

「言ったでしょ、あいつのまわりにはもっと強いのが控えている。そんなの死に行くようなものだわ！」

アリアは知らず知らずのうちに声が大きくなっていく。

自分を助けてくれた二人をこれ以上巻き込みたくない一心で訴える。

「お願い、何も言わないでここから逃げて。ここから先は、あなたたちのような人たちが係わっていい世界じゃないの」

「それはできない」

忍からは明確なる拒否、ゼンガーからも否の意思が見て取れる。

「どうして!？」

「我らが去った後、お前は一人戦うのだろうか？」

「それは・・・」

凶星を付かれ押し黙る。

「こんな状況で、あんた一人だけおいて逃げられるわけがないだろう。だったら、俺達も共に戦うと言っている」

「でも、あなたたちを死なせたくない！」

「違う、俺達が聞きたいのはそんな言葉じゃない」

「えっ」

「俺達は戦う覚悟がある。力もある。あとは、お前の言葉が必要なんだ。聞かせるッ！お前の意思を！！」

ただ一点、アリアの瞳の更に奥。

自らの感情と葛藤する一人の女性を、忍とゼンガーは見つめる。

三人が黙ってからたったのは実質一分ほどであったが、体感時間は一時間にも感じられたことだろう。

「……く……さい」

掠れる声で精いっぱい絞り出した答え。

うまく言葉になっていないが、そこには様々な感情がこもっている。強気だった表情はなりを潜め、今の顔は少女のように弱々しい。

「たすけて、ください」

今まで強がってきた女性の心からの声を聞き、二人の武神が立ち上

がる。

忍はアリアの頭を優しく撫でる。

堪え切れなくなったのかその目からは涙がこぼれ出す。

「よく言った。任せろ、俺達が必ずアリアを守る。行こう、ゼンガ
ー!!!」

「応!」

忍は強く拳を握り、ゼンガもまた剣を握る。

「さあ、戦を始めよう」

君の声で…（後書き）

いかがだったでしょうか？

先の展開も設定も、セリフも全部できているのにもかかわらず、書けない。

パソコンの前で5時間唸って、書いたのが一行の時は本気で泣きたくなりました。

これが所謂、スランプということでしょうか？

まあ何とか続きを文字にしたいと思います。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

思想と動き出す影（前書き）

更新が遅くてすみません。

では、どうぞ！

思想と動き出す影

A r i a s i d e

私は特別な子供だった。

決して頭がずば抜けてよかったわけでも、身体能力が高かったわけでもない。

ただ膨大ともいえる魔力と、魔法を扱う才能を持って生まれてきた。

魔法使いは誰にでもなれるというものではない。

生まれ持ったの才能が大きく作用してくる。

もちろん勉強や修練を積むことはとても大切なことだ。

魔法の種類や練度は全て才能で決まるものではなく、いかに努力を積み重ねて来たかで決まる。

しかし魔力の量やその質は才能に左右され、努力だけではどうすることもできない。

初めから決まっている魔力のタンクを大きくすること、そしてこの中に入っている魔力をより良質なものに変えることは、とてつもなく困難だ。

その点、私はすごく恵まれていた。

魔力の量と質に加え、私が生まれた小さな村は魔法使いが作った村だった。

住まう全ての人が私の魔法の先生であり師匠となる。

多くの人からいろいろな系統の魔法を教わり、十歳を数える頃にはかなりの魔法が使えるようになっていた。

周りから見た私は、いわゆる“神童”というものだ。

ごく当たり前のように難しい魔法を使いこなしていた。

それこそかの英雄、ナギ・スプリングフィールドを彷彿とさせるかのように。

特別視されてもおかしくはないだろう。

そんな風に育った私は、とても普通に当たり前にその考えに至った。

《私は選ばれた特別な人間なんだ》と。

なんて浅はかでちっぽけな考えだろう。

当時の自分を叱ってやりたい。

もしくは穴があったら入りたい。

えっ？どうして今そんな話をしているかって？

それはほんの少し前まで、自分は特別なんだって信じて疑ってなかったから。

私にとっては自分が特別であることが当たり前になっていた。

でもそれは間違いだと、この歳になって初めて知った。

私は特別ななんかじゃないし、ましてや選ばれたわけでもない。

ただほんの少しだけ、他の人より優れた部分を持っていたというだけのこと。

だって……。

「じやくん 尽く、塵と化せ!!」

己が拳一つで、優雅に散歩でもするかのように歩を進め、悪魔を蹂躪していく忍。

「真っ向勝負!」

一振りの刀の怒涛の攻勢をもって、ひたすらに眼前の敵を斬り伏せていくゼンガー。

魔法を使うでもなく、ただ鍛え抜いた身と技を持って一方的に悪魔を屠っていく。

しかも私が見た中で、少なくとも八体は中位クラスの悪魔が存在した。

だが、その程度歯牙にもかけず下位と同じように打ち取っていく。

ほら、こんな光景を目の前で見せられたら自分は特別なんだ、なんて言えるわけがない。

私も戦うつつもりで来たんだが、私が出る幕なんてとてもではないがなさそうだ。

正直悔っていたんだ、この二人を。

忍たちに助けを求めたことを私はすぐに後悔した。

誰かに頼ることをせず生きてきた私だが、あの時はすでに八方塞がりな状況だった。

自分は万全の状態とは言えず、そしてリユイの操る悪魔は強力だ。大軍で押し寄せればあっという間に私は負ける。

それが分かるからこそ薫にもすがる思いだった。

そんな私の中に忍の言葉はするりと入ってきた。

何の根拠もなく、ただ漠然とこの人なら助けしてくれるとそう思った。

大空のように広く、母の愛のように優しく、私を包み込んでくれる
感覚。

気がつけば私は涙を流して助けを求めていた。

なんて恥ずかしい。

とてつもない醜態を目の前で戦う二人にさらしている。

今は二人の顔がまともに見られない。

特に忍の顔なんて見たら顔から炎が噴き出しそうだ。

でも、忍を見ていたい、声を聞いていたいと思う。

この感覚はなんだろう？

忍を見ていると胸が高鳴って苦しくて、でも心地いい。

分らない。

知らない感情が私の心をかき乱す。

もしかして何かに病気にでもかかってしまったのだろうか。

でも、もつしばらくはこの奇妙だけど暖かい感覚を、味わっていたと思う。

せめて二人の戦いが終わるまでは……。

S i d e o u t

太陽の光さえ遮る森の中、二人の人間が活動している。

この自然の中では人間がいること自体が不自然であるが、その状況がさらに異質な空気を作りだしている。

少し開けた場所にあるそこには、真っ白なテーブルとイス。

そのイスに座り、優雅に紅茶を楽しむ男が一人。

傍らの立つメイド服を着た無表情な女。

全くもって森の中では不自然な構図だ。

整った顔立ちをしたスーツ姿の男は、黒い髪をオールバックで固め眼鏡をかけている。

座っているため分りにくいだが、二メートルはあるつかという長身でイスが小さく見える。

テーブルの脇に置いてある黒の帽子とステッキを持てば立派な紳士だ。

惜しむらくはひげを生やしていないことだろう。

その斜め後ろに控えるメイド服を身に付けた女性は、彼とは対照的に背が低い。

百五十あるかないかといったところだろうか。

長い髪を襟足あたりで結び、頭にはヘッドドレスを着用している。

その顔は能面のように感情が見えず、一見すると人形のようにも見える。

「ふむ、この静かな大自然の中で飲む紅茶は格別だ。そうは思わんかね、ネフィア？」

「はい。マスター、リユーイ」

今ここで紅茶を飲むこの男こそアリアを追う者、リユーイ。

そして、その従者、ネフィア。

「手始めにと送った雑魚あくまたちはアリアに還された。あの者に悪魔を還す力があることが少々解せんが、今回は雑魚の中に中位の悪魔を混ぜてある。すぐに終わるだろう」

リユーイは決して自らの手を汚さない。

敵に使役する悪魔を差し向けて終わりだ。

ただ一言、こいつを殺せと命じるだけ、それがこの男の戦い方。

「マスター、御報告します」

ネフィアには監視している悪魔たちに動きがあった場合、それをリユーイに報告する義務がある。

「ああ、ついにアリアが死んだか？許す、話せ」

「はい、アリア討伐に向かった下位悪魔二十七体。中位悪魔八体。計三十五体の悪魔……全滅しました」

耽々と話すネフィアの説明を聞き、リユーイの動きが停止する。

「……な、んだと。もう一度、説明したまえ」

「はい、アリア討伐に向かった下位悪魔二十七体。中位悪魔八体。計三十五体の悪魔は全滅しました」

「馬鹿なッ！！??」

今まで飲んでいた紅茶のカップを地面に叩きつけ、怒りと驚きの声を上げる。

「事実です」

「黙れッ!?!」

リユーイは手に持ったステッキでネフィアを殴りつけた。

更に地面に倒れたネフィアをそのステッキで殴り続ける。

「あ、あのような屑に、私の駒あぐまが全滅!?!?! 認めぬ、認めぬぞ
!?!」

「マ、マスター」

「京都の千草とかいう女が、封印された飛騨の大鬼神を復活させる。あれが復活させた時に、その鬼の制御を奪い取るためにはアリアの持つ、星詠の杖　ラグナロクが不可欠。手に入れられなければ、わざわざ奴の作戦に協力した意味がない!」

一通り叫んだところでリユーイの表情から感情が抜けおちる。

それはどこまでも冷酷で残忍な魔法使いの貌。

「出し惜しみはしない。全力でアリアを殺しラグナロクを奪い取る。行くぞ、ネフィア」

「Yes , Master」

帽子をかぶりステッキを携え、魔法使いと従者が動き出す。

その背に悪魔を従えて・・・。

思想と動き出す影（後書き）

いかがだったでしょうか？

ゼンガー少佐のアーティファクトは考えるまでもなく決まったんですが、

忍のアーティファクトが実はまだ正式に決まってません。

いくつか案はありますが、早いうちに決めないといけませんね。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

偽りを見抜く眼を持つということ

「・・・ふう、周りに気配は無い。悪魔は全て倒したか？」

「うむ」

忍は握っていた拳を解き、ゼンガーは刀を鞘へと収める。

小屋を出て少し経った頃に襲いかかってきた悪魔たちだったが、成す術もなくすべて打ち取られていた。

「アリア、移動する・・・どうした？」

「ふえ！？」

どこか上の空だったことを心配したのか、覗き込むようにして見つめる忍。

アリアは忍の顔を間近で見たことですつとんきょんな声を上げていた。

「顔が赤いぞ、熱でもあるんじゃないか？」

忍の手がアリアの額に触れる。

ポフンッ

「ッ／＼。大丈夫、大丈夫だから！」

すごい勢いで離れたアリアに若干落ち込んだ忍であった。

「・・・大丈夫なら、それでいい。先へ進もう」

「・・・待て、何か来る」

ゼンガーから制止の声がかかる。

「・・・どうやら連戦になりそうだな。やれやれだ」

忍も気配に気がつき肩を竦める。

忍たちに向けられるのは静かな殺意。

唯一アリアだけが、状況を理解できておらず困惑している。

「やあ久し振りだね、愛しのアリア」

「!?!」

暗き森を抜け忍たちの前に姿を現す二つの影。

アリアの名を呼んだその人物はスーツを着た長身の男性。

その斜め後ろには小柄な女性が見える。

「リユー・・・イ」

アリアは様々な感情がない交ぜになったような顔をして固まっている。

又、戦闘が終わってすぐ忍の頭の上に上ったクウが、明らかにリユーイを威嚇している。

「どうやら親玉の登場らしい。・・・嫌な目をしている」

忍の声を聞き初めてアリア以外にも人がいることに気がついたのか、忍とゼンガーに視線を向ける。

「アリア以外にも誰かいるとは思わなかった。・・・なるほど、私の悪魔を倒していたのは君たちかな？」

「なぜ、そう思う？」

「アリアは生粋の魔法使いだからね。前衛を守る者がいなければ何もできない」

（なぜアリアが私の悪魔を倒すことができたのか疑問だったが、これで納得した。しかしこいつら、魔法使いではないな。魔法も使えない肩が私の悪魔を倒す、忌々しい限りだ）

リユーイは二人に対する怒りやら侮蔑やらを隠し、笑顔で応答して

いく。

「・・・それで、大将自らお出ましとは何の用だ？」

「君たちが居たのはちょうど良かった。・・・アリアを引き渡して
いただきたい」

「!？」

「ほう」

敵からの引き渡し要求にアリアは肩を震わせ、忍は緊張感のない様子で答える。

「アリアさえ引き渡してくれば君たちには一切手を出さない。約束しよう。どうだね、悪い条件ではないと思うのだが」

(ふん、間違いなくこいつらはこの条件を飲む。アリアの絶望に歪む顔が浮かぶようだ)

リユーイは内心の笑みを隠し、努めて真剣な表情を貫く。

「一つ聞きたい。なぜお前はアリアを執拗に狙う？」

突然、今まで黙っていたゼンガーが問いかける。

「正確にはアリアだけでなく、彼女の持つ杖もだがね。彼女を狙ったのはある目的があったからだ」

「それはどんな？」

「今、京都ではかつての大戦の英雄たちが封印した、飛驒の大鬼神を復活させる計画が進行している。その計画を止めるためにそれが必要なのだ」

リユーイはアリアが手に持つモノを指さす。

「計画を止める、か。その計画を止めないと大変なことになるってことか」

「その通りだ。このままでは全くの無関係な者が巻き込まれてしまう。事態は急を要するのだ。そのために君たちまで襲うような真似をしてしまったことは謝らせてもらう。すまなかつた。それでどうだろう、皆を救うため協力してはくれないだろうか？」

「それならなぜ初めからアリアに協力を求めない？その計画とやらを止めるためにアリアの持つ杖が必要なら最初にアリアに言えばいいだけだろう？」

もつともな疑問が忍の口から出てくる。

「確かにその通りだ。しかし、それはできない」

「なぜ？」

「その杖は特殊だね。杖と契約を交わした者しか使うことができない。再契約ができるのは現在の契約者が死んだ時だけだ。・・・後は言わなくても分かるね？」

「つまりお前は、杖と契約を交わすためだけにアリアを殺すと？」

忍は自然体であるもののその瞳には強い敵意が宿った。

「おいおい、勘違いをしてもらっては困るな。杖と契約する為に殺すのではなく、“全”を救う為の尊い犠牲になってもらうのだ。聡い君たちならどちらがより多くの者を救えるか聞くまでもないだろう。さて、それでは彼女を引き渡してもらえるかな？」

満面の笑みで忍たちに手を出す。

まるで、迷える者たちに救いの手を差し伸べる神父のように。

「なるほどな。それは確かに聞くまでもないことだ。そうだろう、ゼンガー？」

「うむ、我々の答えなどとうに決まっている」

目を閉じ腕を組んだゼンガーへと、視線を向けていた忍。

互いの意思を聞き、二人はゆっくりとリユーイと向き合う。

その時二人の背に隠れるような形になったアリアには、二人の背中がとても大きく見えた。

「断るッ！！！！」

回答は否。

決して大きくなかった二人の声が異様なまでに響き渡る。

「聡い君たちならとか言ってたけど。お生憎さま、俺はそんなに頭良くないんだよ。ウソつき野郎」

「貴様の言は偽りと悪意に満ちている。そのような者の言葉、聞く耳持たん！」

ただまっすぐに愚直なまでに偽りのない言葉に、その場にいる者たちの心に響く。

「わ、私の言葉の一体どこに偽りが交じっているか？」

「この世界には、息を吐くように嘘を吐くヤツがいる。お前もそれだ。そういうヤツの言葉は、軽いんだ。いくら真っ直ぐで正しくてきれいな言葉でも、お前の言葉に、聞く者の心を動かすような力はない!!」

忍の一喝を聞き、肩を震わせるリユイーの皮が剥がれる。

「・・・言いたい放題言ってくれたな、屑の分際で!もういい、お前たちは皆殺しだ。肉片一つ残らず、消し飛ばしてくれろッ!!」

「ふっ、まどろっこしい禅問答は終わったか。ならば・・・」

静かに忍は眼を閉じ、そしてゆっくりと開ける。

ゼンガーもまた腰に差した刀を抜き放つ。

二人は等しく“戦う者”へと変貌^かわる。

「流動 忍、まかり通るッ!！」

「ゼンガー・ゾンボルト、推して参るッ!！」

偽りを見抜く眼を持つということ（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は少し短かったですね。

自分でも短いと感じる。

他の方の作品を読んでいると、一話が私が書くのより全然長い。少し鬱です。

この武神編（勝手に命名）はおそらくあと五話程度で終わると思いますので、もうしばらくお付き合いください。
オリジナルの展開は難しいです。

では、ここまで読んでいただいた方に最大級の感謝を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3753v/>

その拳で語る者

2011年10月3日21時19分発行